平成25年度厚生労働科学研究費補助金
(厚生労働科学特別研究事業)
研究課題「一般用医薬品の地域医療における役割と国際動向に関する研究」
生活者、薬剤師、医師を対象とした一般用医薬品および一般用検査薬に関する意識調査

研究代表者　望月 眞弓 (慶應義塾大学薬学部教授)
研究協力者　鈴木 邦彦 (日本医師会常任理事)
生出 泉太郎 (日本薬剤師会副会長)
飯島 康典 (長野県上田薬剤師会)
丸山 順也 (慶應義塾大学薬学部助教)

要旨

本研究では、一般用医薬品を取り巻く状況の変化を踏まえ、現在の実情にあった一般用医薬品の地域の医療提供体制において担うべき役割などを含め、スイッチ一般用医薬品のあり方等について検討するにあたり、一般用医薬品および一般用検査薬に対する生活者および薬剤師の意識およびニーズについてインターネットによるアンケート調査を行った。生活者は、ネットモニターを利用し、薬剤師は日本薬剤師会会員ならびに日本チェーンドラッグストア協会会員に対して実施した。

その結果、調査に回答した生活者（一般用医薬品に関する調査群）781名においては、一般用医薬品は利便性が高いと回答したのは50.1%であったが、情報量が多いと感じているのは25.7%であった。生活者（一般用検査薬に関する調査群）764名においては、自分で健康状態を検査できる方法として、「尿を取り検査をする」が77.9%、「だ液を取り検査をする」が63.1%、「口の中の粘膜を綿棒などで取り検査をする」が50.7%であり、侵襲性の低い方法を求める傾向にあった。この結果は、薬剤師の調査結果でも同様の傾向にあった。薬剤師に対する一般用検査薬に関する調査結果では、一般用検査薬に求められる要件やその結果の利用について、検体採取が簡便であること、結果の相談先が明確であること、結果の評価が容易であることが挙げられた。また、一般用検査薬に対する検査項目として、「血糖値」が82.4%、「HbA1c」、「コレステロール、中性脂肪」がそれぞれ68.9%、68.3%であった。

今後、これらの調査結果をもとに、一般用医薬品および一般用検査薬に求められる要件等を整理し、現在の実情にあった一般用医薬品および一般用検査薬について検討する。

A. 研究目的

近年、急速な高齢化の進展や生活習慣病の増加などの疾病構造の変化、生活の質（QOL）の追求等に伴い、自分の健康に強い関心を持つ国民が増えるとともに、薬局や薬店の薬剤師等による適切なアドバイスの下で、身近にある一般用医薬品（OTC薬）を利用するセルフメディケーションの重要性が注目されてきている。

また、平成24年12月に生活習慣病薬のスイッチOTC薬が初めて承認されたことを受け、今後どのような形でこれまでより診断治療と密接に結びついた形で使用する必要がある医薬品のスイッチ化を進めるのか、社会的にも大きな注目を集めたところである。

政府は、一般用医薬品への転用をどのように進めて行くべきかについて、医師や薬剤師が参加して議論する場を設けることを表明しており、セルフメディケーションを推進していく上で、緊急に検討をすべき課題となっている。

また、厚生労働省が平成25年6月に公表した「医薬品産業ビジョン2013」において、「より適切なスイッチOTC薬化を進めるために、新たなスキームの検討を行うこととしている。」とされており、検討の場が求められている。

平成14年11月8日一般用医薬品承認審査合理化等検討会において、「セルフメディケーションにおける一般用医薬品のあり方について」（中間報告書）として、医薬品の範囲、開発の促進、情報提供の拡充、承認審査の改善等が具体的な提言として示されている。

そこで本研究では、その後の一般用医薬品を取り巻く状況の変化を踏まえ、現在の実情にあった一般用医薬品の地域の医療提供体制において担うべき役割などを含め、スイッチ一般用医薬品のあり方等について検討するにあたり、一般用医薬品および一般用検査薬に対する生活者および薬剤師の意識調査を行った。

B. 研究方法

生活者を対象とした調査は、一般用医薬品に関する調査群と一般用検査薬に関する調査群の 2 群に分けて行った。平成 25 年 3 月 12 日から 3 月 14 日に、株式会社インテージのインテージ・ネットモニターを利用し、インターネット調査にて実施した。対象は、18 歳以上の男女とし、3 月 14 日までに WEB 画面より入力された回答を集計した。

薬剤師を対象とした一般用医薬品および一般用検査薬に関する意識調査は、日本薬剤師会ならびに、日本チェーンドラッグストア協会に協力を仰ぎ実施した。株式会社インテージに委託し、インターネットから回答可能な調査画面を準備し、平成 25 年 3 月 10 日に、日本薬剤師会 44,571 施設及び日本チェーンドラッグストア協会会員企業 157 社を調査対象とし、各会員向けに調査画面の URL を公開し、3 月 14 日までに WEB 画面より入力された回答を集計した。

調査項目は、それぞれ主設問（生活者用（一般用医薬品に関する調査群）13 問、生活者用（一般用検査薬に関する調査群）10 問、薬剤師用 18 問）と回答者属性設問（生活者用（一般用医薬品に関する調査群）9 問、生活者用（一般用検査薬に関する調査群）9 問、薬剤師用 4 問）を設定した。本インターネット調査の実施は、株式会社インテージへ委託し行った。

なお、医師を対象とした一般用医薬品および一般用検査薬に関する意識調査については、日本医師会に協力を仰ぐこととし、生活者及び薬剤師用とともに調査項目を検討した。

C. 研究結果

調査期間内に集積された回答は、生活者（一般用医薬品に関する調査群）781 人、生活者（一般用検査薬に関する調査群）764 人であり、全件分析対象とした。一方、薬剤師 1,343 人のうち、入力情報に不備があるものを除き、有効回答数は 1,219 人であった。各調査対象者の回答状況を**表 1** に示した。

各設問に対する回答の中から、論点ごとに、主要な結果を以下に示す。

表 1　各調査の回答状況

協力団体	対象者	配信数	回答数	回収率
患者パネル	生活者 一般用医薬品に関する調査群	3,240	781	24.1%
患者パネル	生活者 一般用検査薬に関する調査群	3,563	764	21.4%
日本薬剤師会および日本チェーンドラッグストア協会	薬剤師 日本薬剤師会 44,571 施設 日本チェーンドラッグストア協会会員企業 157 社	―	1,219	―

※薬剤師については有効回答数（人）

1. 回答者属性

1）生活者（一般用医薬品に関する調査群）の属性

別表 1 に示した。

2）生活者（一般用検査薬に関する調査群）の属性

別表 2 に示した。

3）薬剤師の属性

年齢階級別では、29 歳以下 22.1%、30～39 歳 42.1%、40～49 歳 17.6%、50～59 歳 12.1%、60～69 歳 5.0%、70 歳以上 1.0%であった（**表 2**）。

表 2　年齢別回答者数

本調査　　構成比（%）

	回答者数（人）	本調査	全国
29 歳以下	280	23.0	13.1
30～39 歳	521	42.7	25.6
40～49 歳	206	16.9	24.2
50～59 歳	142	11.6	21.0
60～69 歳	57	4.7	11.7
70 歳以上	13	1.1	4.4
計	1219	100.0	100.0

＊全国は厚生労働省「平成 24 年　医師・歯科医師・薬剤師調査」から薬局のデータ。

2. 生活者に対する一般用医薬品に関する意識調査について

1) 一般用医薬品のリスク分類について

一般用医薬品は、第一類医薬品、第二類医薬品、第三類医薬品の 3 種類に区分されることを知っているかについて問うたところ、**図 1** に示すように、「知っている」が 50.2%であった。また、「知っている」と回答した人のうち、第一類医薬品、第二類医薬品、第三類医薬品の区分が、医薬品のリスクの程度により分類されていることを知っているかについて問うたところ、**図 2** に示すように、「知っている」が 69.1%であり、第一類医薬品は薬剤師が情報提供や相談対応しながら販売することが義務づけられていることについて知っていか問うたところ、**図 3** に示すように、「知っている」が 81.6%であった。

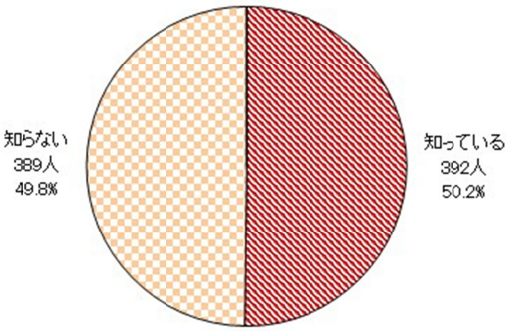


図 1　一般用医薬品は第一類医薬品、第二類医薬品、第三類医薬品の
3 種類に区分されることについて（n=781）

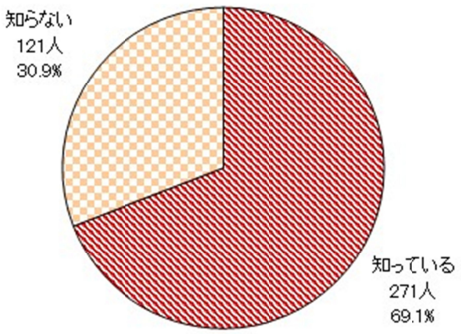


図 2　一般用医薬品の分類は医薬品のリスクの程度による分類であることについて（n=392）

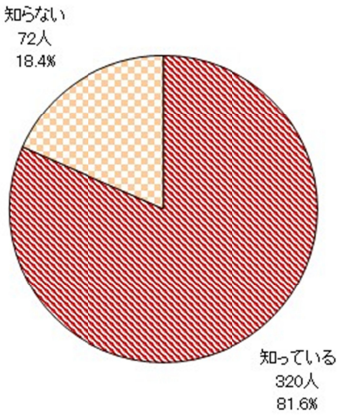


図 3　第一類医薬品は薬剤師が情報提供や相談対応しながら販売することが義務づけられていることについて（n=392）

2) 一般用医薬品の使用について

今までにどのような一般用医薬品を使用したことがあるかについて問うたところ、**図 4** に示すように、「かぜ薬」が 79.6%と最も高く、次いで「胃腸薬」が 49.7%、「頭痛、筋肉痛の薬」が 48.8%であった。また、一般用医薬品を使用（購入）する理由について問うたところ、**図 5** に示すように、「普段から一般用医薬品を使用しているから」が 46.3%と最も高く、次いで「近くに薬局・薬店があり一般用医薬品を購入しやすいから」が 38.6%、「忙しくて病院や診療所に行く時間がとれないから」が 27.8%であった。

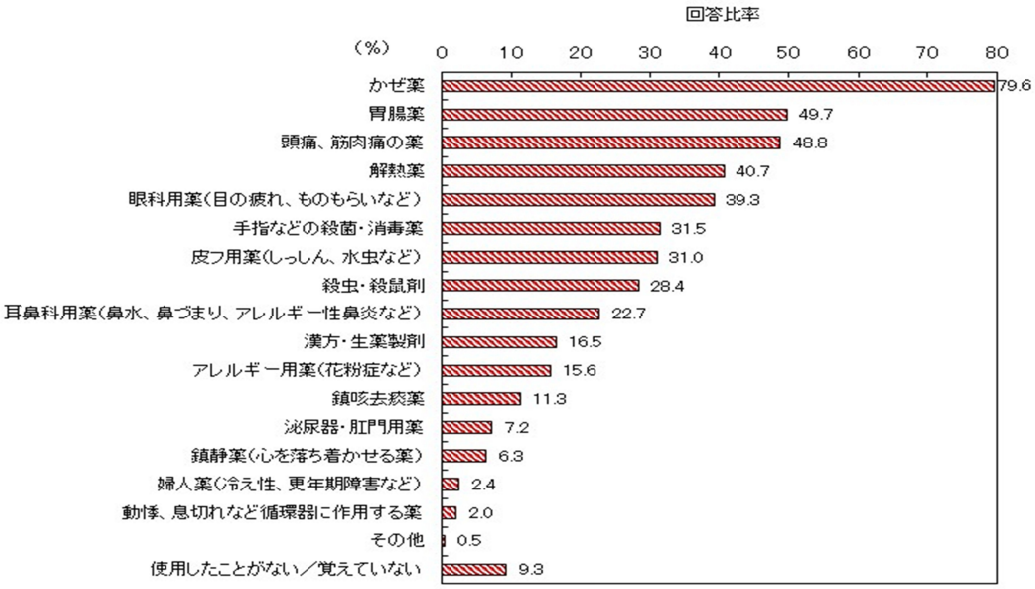


図 4　今までにどのような一般用医薬品を使用したことがあるかについて（複数回答可）

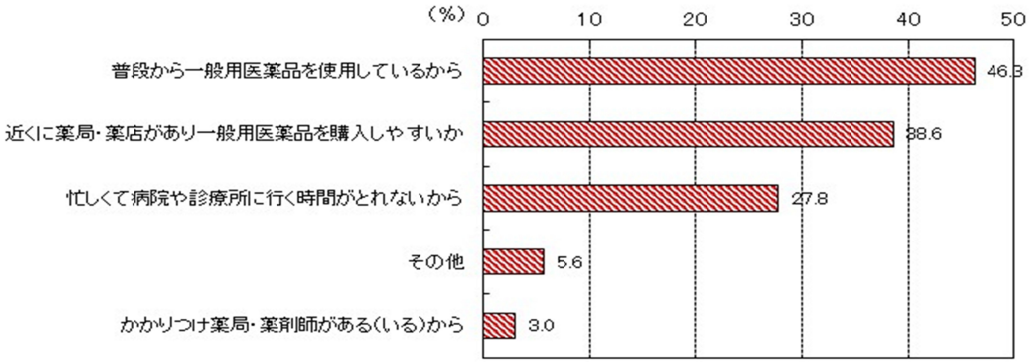


図 5　一般用医薬品を使用（購入）する理由（複数回答可）

さらに、かぜや肩こりなど自分で症状が判断できるような場合、あなたはどうしているかについて問うたところ、**図 6** に示すように、「しばらく様子をみる」が 36.6%で最も高く、次いで「家にある一般用医薬品を使う」が 33.8%、「かかりつけ医に相談する」が 16.6%であった。

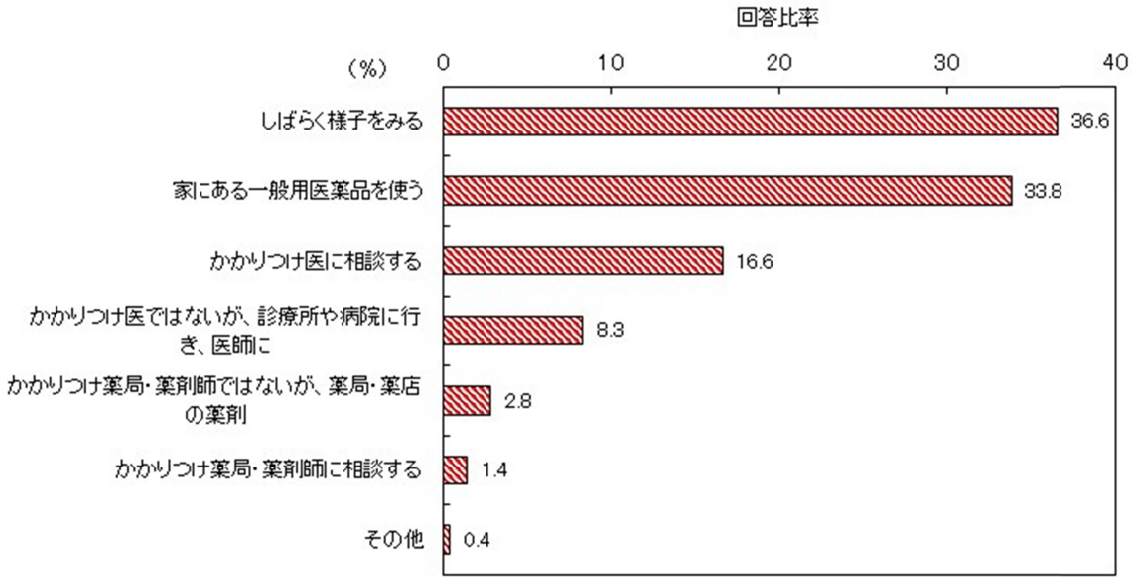


図 6　かぜや肩こりなど自分で症状が判断できるような場合につい

3) 一般用医薬品のイメージについて

一般用医薬品に対するイメージについて利便性を問うたところ、**図 7** に示すように、「どちらかといえば利便性は高い」が 50.1%と最も高く、次いで「どちらともいえない」が 24.5%、

「利便性は高い」が 22.4%であった。効き目について問うたところ、**図 8** に示すように、「どちらともいえない」が 50.7%と最も高く、次いで「どちらかといえば効き目は高い」が 27.4%、「どちらかといえば効き目は低い」が 17.4%であった。安全性について問うたところ、**図 9** に示すように、「どちらともいえない」が 53.0%と最も高く、次いで「どちらかといえば安全性は高い」が 36.9%、「安全性は高い」が 5.2%であった。情報の得やすさについて問うたところ、**図 10** に示すように、「どちらともいえない」が 45.3%と最も高く、次いで「どちらかといえば得やすい」が 39.1%、「どちらかといえば得にくい」が 7.3%であった。情報の量について問うたところ、**図 11** に示すように、「どちらともいえない」が 60.9%と最も高く、次いで「どちらかといえば多い」が 22.2%、「どちらかといえば少ない」が 11.3%となっている。

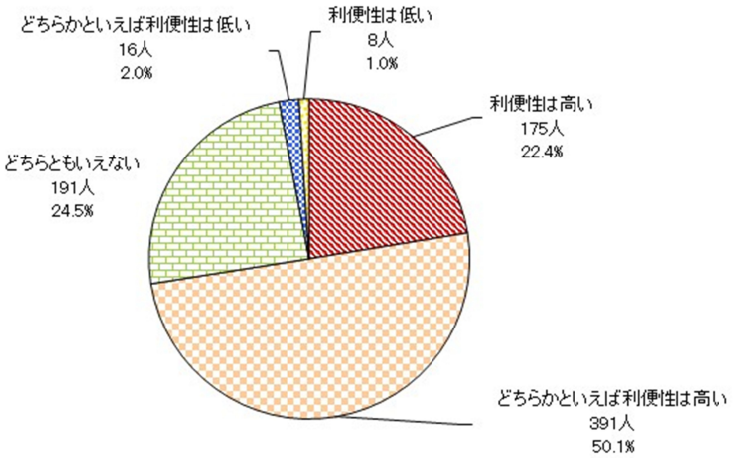


図 7　一般用医薬品に対するイメージ（利便性について）（n=781）

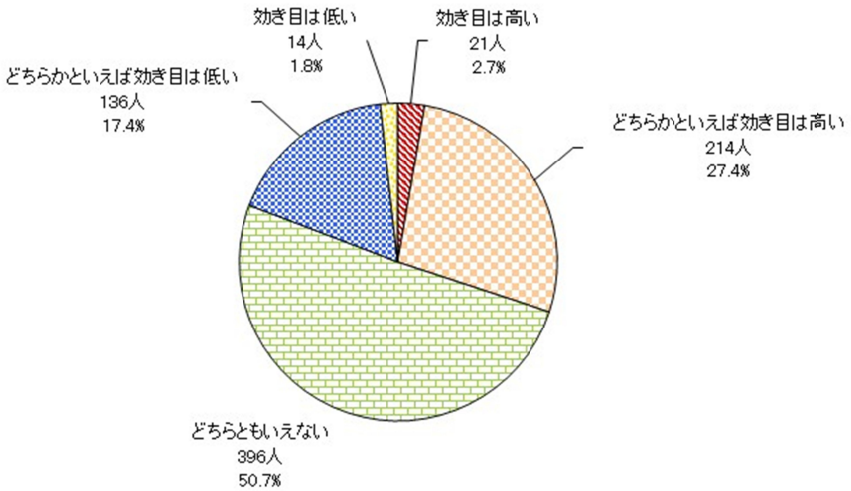


図 8　一般用医薬品に対するイメージ（効き目について）（n=781）

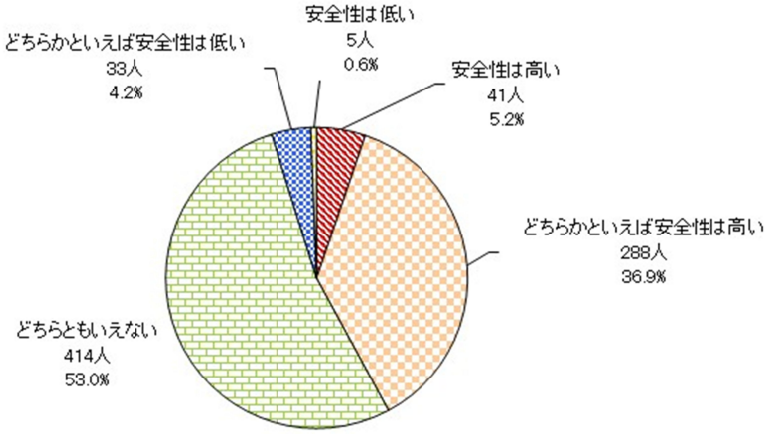


図 9　一般用医薬品に対するイメージ（安全性について）（n=781）

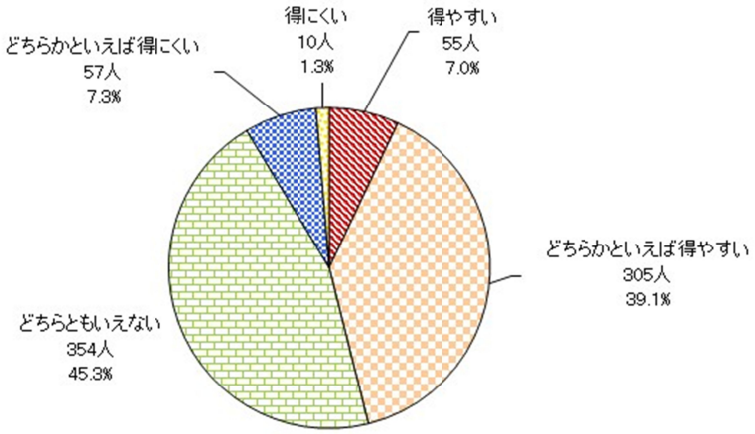


図 10　一般用医薬品に対するイメージ（情報の得やすさについて）（n=781）

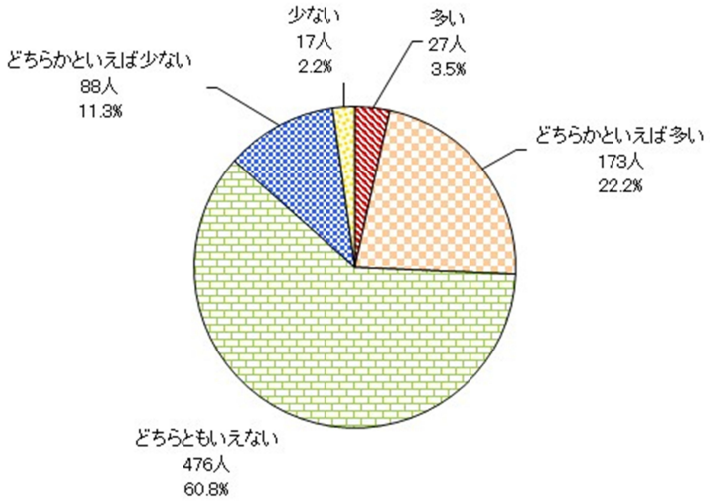


図 11　一般用医薬品に対するイメージ（情報の量について）（n=781）

4) 妊娠中や授乳中の一般用医薬品の服用について

妊娠中や授乳中の一般用医薬品に服用にて、妊娠中や授乳中でも比較的安全に服用が可能な一般用医薬品があると思うかどうかについて問うたところ、**図 12** に示すように、「思わない」が 56.3%であり、また妊娠中や授乳中の服用について十分な情報が提供されているかどうか問うたところ、**図 13** に示すように、「情報不足である」が 84.4%であった。

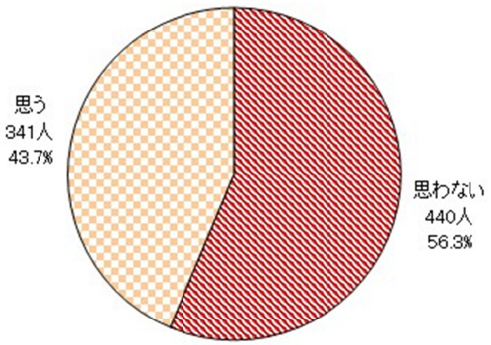


図 12　妊娠中や授乳中でも比較的安全に服用が可能な一般用医薬品もある（n=781）

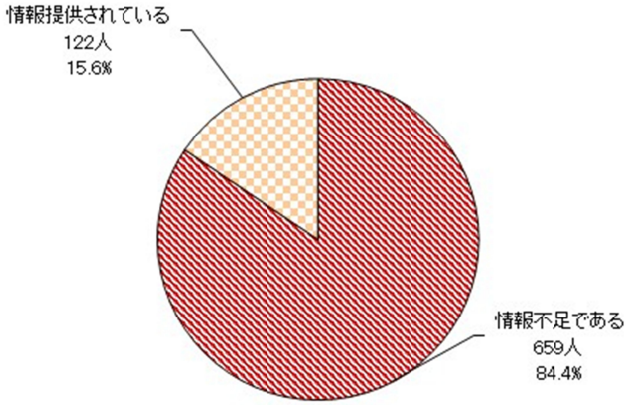


図 13　妊娠中や授乳中の服用について、十分な情報が提供されている（n=781）

5) 一般用医薬品の副作用について

一般用医薬品を原因とした重篤な副作用（死亡を含む）が起きることがあることを知っているかどうか問うたところ、**図 14** に示すように、「知っている」が 44.7%であり、また、医薬品副作用被害救済制度（医薬品を適正に使用したにもかかわらず副作用による重篤な健康被害が生じた場合に、医療費等の給付を受けることができる制度）を知っているかどうか問うたところ、**図 15** に示すように、「知っている」は 14.7%であった。

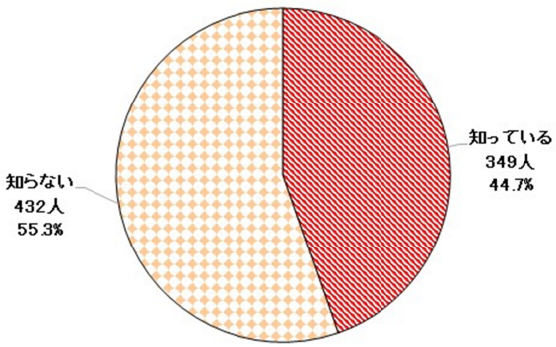


図 14　一般用医薬品を原因とした重篤な副作用（死亡を含む）が起きることがある（n=781）

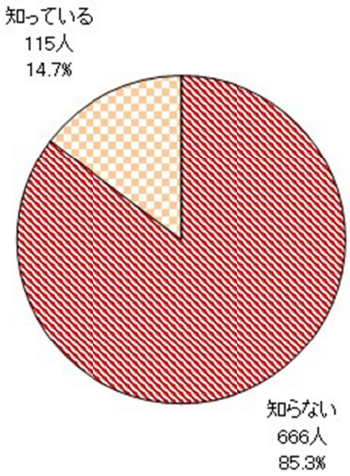


図 15　医薬品副作用被害救済制度を知っているか（n=781）

5) スイッチ医薬品について

医療用医薬品と同じ有効成分でありながら、処方せんがなくても薬局・薬店で購入できる医薬品であるスイッチ医薬品について知っているか問うたところ、**図 16** に示すように、「知っている」は 12.0%であった。また、「知っている」と回答した 94 人に、現在、ガスター10 やアレグラ FX などがスイッチ医薬品として販売されているが、胃痛や花粉症などの自覚症状がある場合、スイッチ医薬品を使用したいと思うかどうか問うたところ、**図 17** に示すように、「かかりつけ医に相談してから使用したい」が 26.5%で最も高く、次いで「かかりつけ薬局・薬剤師ではないが、薬局・薬店の薬剤師に相談してから使用した」が 18.1%であった。

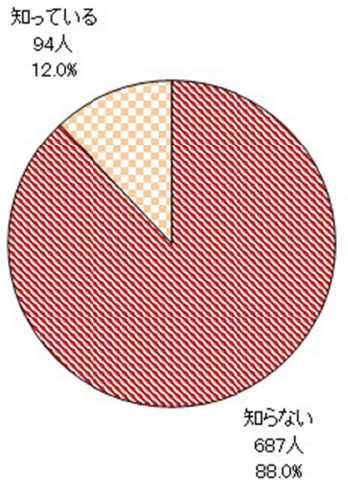


図 16　スイッチ医薬品を知っているか（n=781）

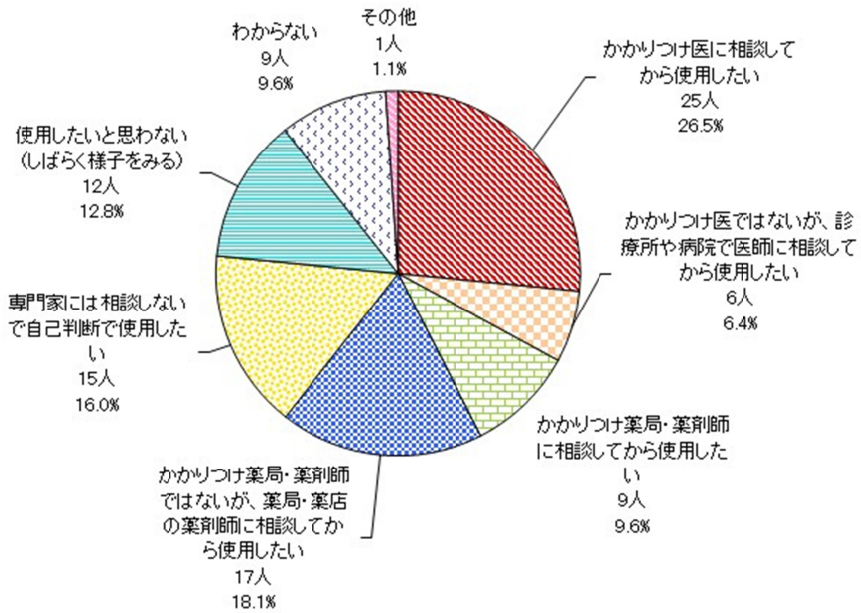


図 17　胃痛、花粉症などの自覚症状がある場合、スイッチ医薬品を使用したいか（n=94）

また、今後どのような医薬品を薬局・薬店で発売してほしいかについて自由回答にて回答を求めたところ、**表 3** に示すように、「（特に）なし」が 602 件、「わからない」が 22 件であり、「風邪薬」との回答が 15 件、「鎮痛剤」が 11 件であった。

表 3　今後どのような医薬品を薬局・薬店で発売してほしいか

主な回答内容	回答数（件）
（特に）なし	602
わからない	22
風邪薬	15
鎮痛剤	11
鼻炎に対する薬	8
胃薬、胃腸薬	8
降圧薬	6

さらに、一般用医薬品またはスイッチ医薬品についての意見や希望、不満に感じていることについて自由回答を求めたところ、**表 4** に示すように、「（特に）なし」が 662 件であり、「価格を安くしてほしい」との回答が 11 件、「効き目がわからない、低い」が 4 件であった。

表 4　一般用医薬品またはスイッチ医薬品についての意見や希望、
不満に感じていること

主な回答内容	回答数（件）
（特に）なし	663
価格を安くしてほしい	11
効き目がわからない、低い	4
副作用の説明をしてほしい	4
どの薬がスイッチ医薬品かわからない	3

3. 生活者に対する一般用検査薬に関する意識調査について

1) 現在購入可能な一般用検査薬の使用経験について

現在購入できる一般用検査薬の中で、使用したことあるものについて問うたところ、**図 18** に示すように、「妊娠検査薬（尿中 hCG）」との回答が 119 件（15.6%）で最も高く、次いで「尿蛋白（尿たんぱく）」が 32 件（4.2%）、「尿糖」が 25 件（3.3%）であった。

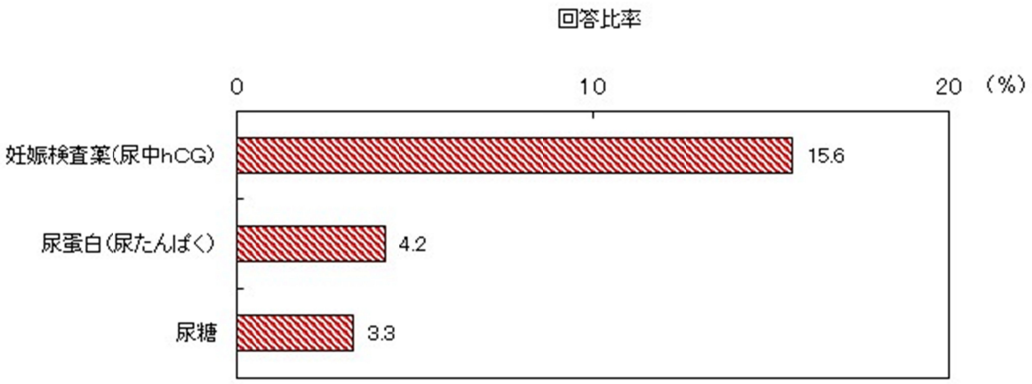


図 18　現在購入できる一般用検査薬の中で、使用したことのあるもの（複数回答可）（n=764）

2) 健康診断や人間ドックの受診状況について

健康診断や人間ドックを定期的に受けているかどうかについて問うたところ、**図 19** に示すように、「毎年受けている」が 49.7%と最も高く、次いで「定期的ではないが、受けたことがある」が 21.1%、「受けたことがない」が 19.1%であった。「男性 30 代」では、「毎年受けている」が 55.6%と最も高く、次いで「受けたことがない」が 26.4%、「定期的ではないが、受けたことがある」が 16.7%であった。「女性 40 代」では、「毎年受けている」が 50.7%と最も高く、次いで「定期的ではないが、受けたことがある」が 24.7%、「受けたことがない」が 19.2%であった。「女性 70 代以上」では、「毎年受けている」が 56.8%と最も高く、

次いで「定期的ではないが、受けたことがある」が 18.9%、「毎年ではないが定期的に受けている」と「受けたことがない」は、ともに 12.2%であった。

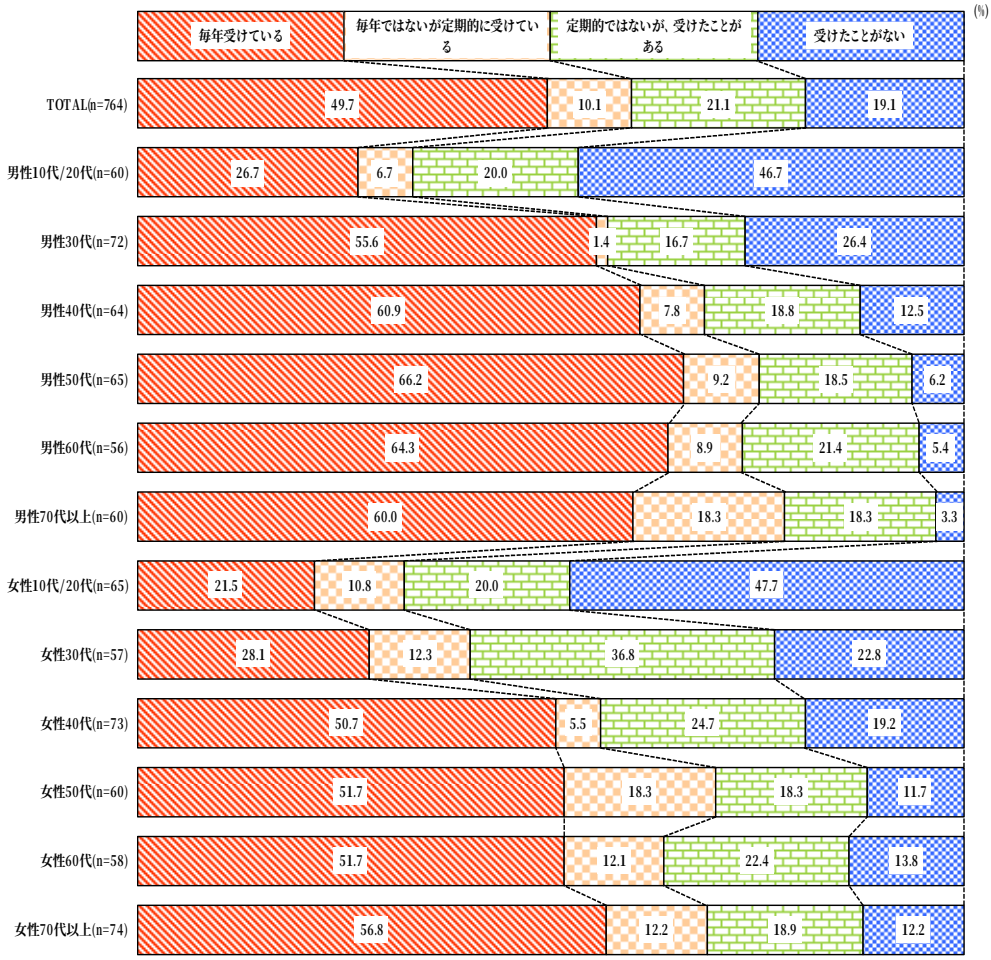


図 19　健康診断や人間ドックの受診状況（n=764）

3) 健康状態の把握について

健康状態の把握のためにどのようなことを心掛けているか問うたところ、**図 20** に示すように、「専門家に相談する前に、まず自分でできる範囲のことをする」が 42.0%と最も高く、次いで「かかりつけ医に相談する」が 34.2%、「かかりつけ医はいないが、診療所や病院に受診し医師に相談する」が 19.0%であった。「男性 30 代」では、「専門家に相談する前に、まず自分でできる範囲のことをする」が 62.5%と最も高く、次いで「かかりつけ医に相談する」が 19.4%、「かかりつけ医はいないが、診療所や病院に受診し医師に相談する」が 16.7%であった。「女性 40 代」では、「専門家に相談する前に、まず自分でできる範囲のことをす

る」が 60.3%と最も高く、次いで「かかりつけ医はいないが、診療所や病院に受診し医師に相談する」が 20.5%、「かかりつけ医に相談する」が 13.7%であった。「女性 70 代以上」では、「かかりつけ医に相談する」が 71.6%と最も高く、次いで「専門家に相談する前に、まず自分でできる範囲のことをする」が 18.9%、「かかりつけ医はいないが、診療所や病院に受診し医師に相談する」が 8.1%であった。

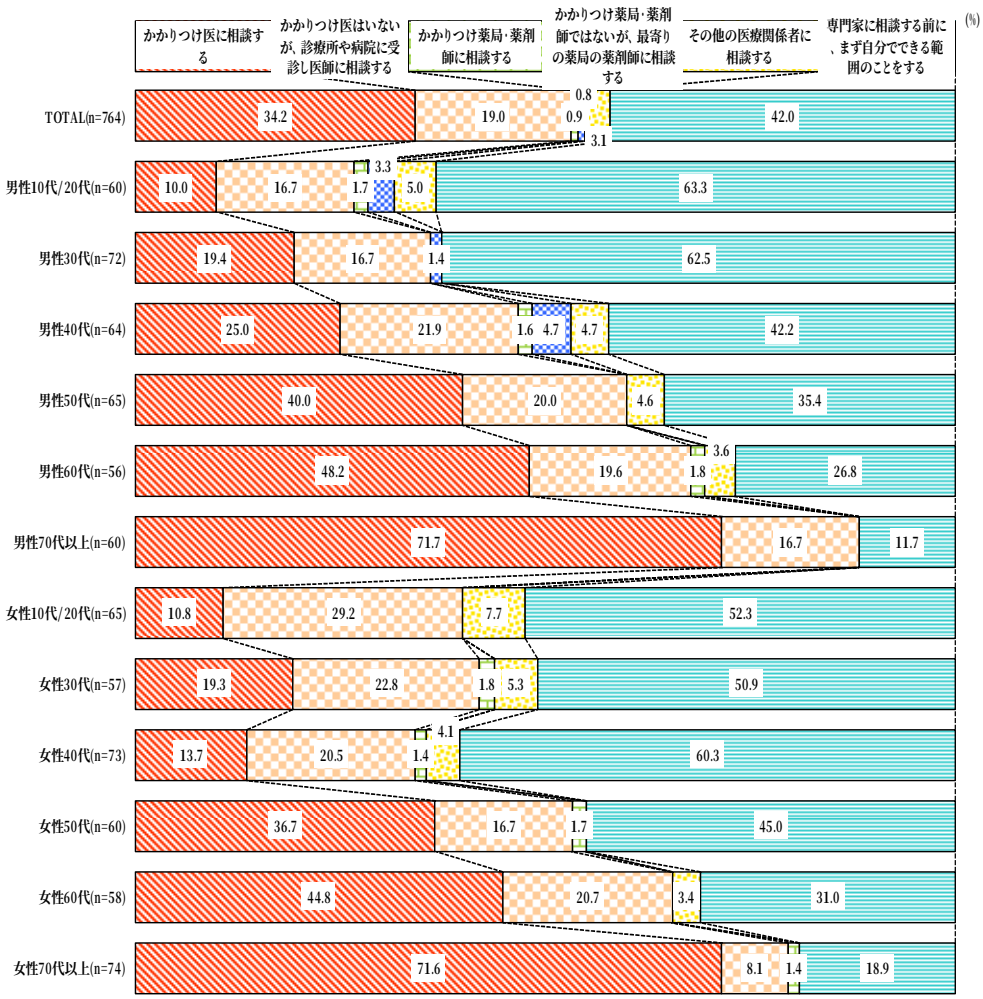


図 20　健康状態の把握するために心掛けていること（n=764）

また、健康状態を把握するために実際にどのような健康チェックを行っているか、また、なにを把握したいについて自由記載にて問うたところ、**表 5** に示すように実際に行っている健康チェックとしては、「血圧測定」が 93 件、「体重測定」が 92 件、「血液検査」が 57 件であった。また、今後行いたい健康チェックとしては、**表 6** に示すように、「健康診断」、「人間ドック」がそれぞれ 24 件、「血圧測定」が 19 件、「脳ドック」が 18 件であった。

表 5　実際に行っている健康チェック

主な回答内容	回答数（件）
血圧測定	93
体重測定	92
血液検査	57
健康診断	31
尿検査あるいは尿の色をみる	25
検診各種	23
体脂肪測定	23
レントゲン	17
人間ドック	16
心電図	12
血糖値測定	11
（特に）なし	425

表 6　今後行いたい健康チェック

主な回答内容	回答数（件）
健康診断	24
人間ドック	24
血圧測定	19
脳ドック	18
血液検査	17
がん検診	10

3) 自己検査薬を使った健康管理について

今後自分で使用する検査薬が増えた場合に、それらを使って自身の健康管理をするかどうについて問うたところ、**図 21** に示すように、「どちらともいえない」が 40.8%と最も高く、次いで「どちらかといえば、してみたい」が 33.6%、「どちらかといえば、したいと思わない」が 13.1%であった。「男性 30 代」では、「どちらともいえない」が 38.9%と最も高く、次いで「どちらかといえば、してみたい」が 34.7%、「どちらかといえば、したいと思わない」が 13.9%であった。「女性 40 代」では、「どちらともいえない」が 47.9%と最も高く、次いで「どちらかといえば、してみたい」が 30.1%、「したいと思わない」が 9.6%であった。「女性 70 代以上」では、「どちらともいえない」が 37.8%と最も高く、次いで「どちらかといえば、してみたい」が 27.0%、「どちらかといえば、したいと思わない」が 16.2%であった。

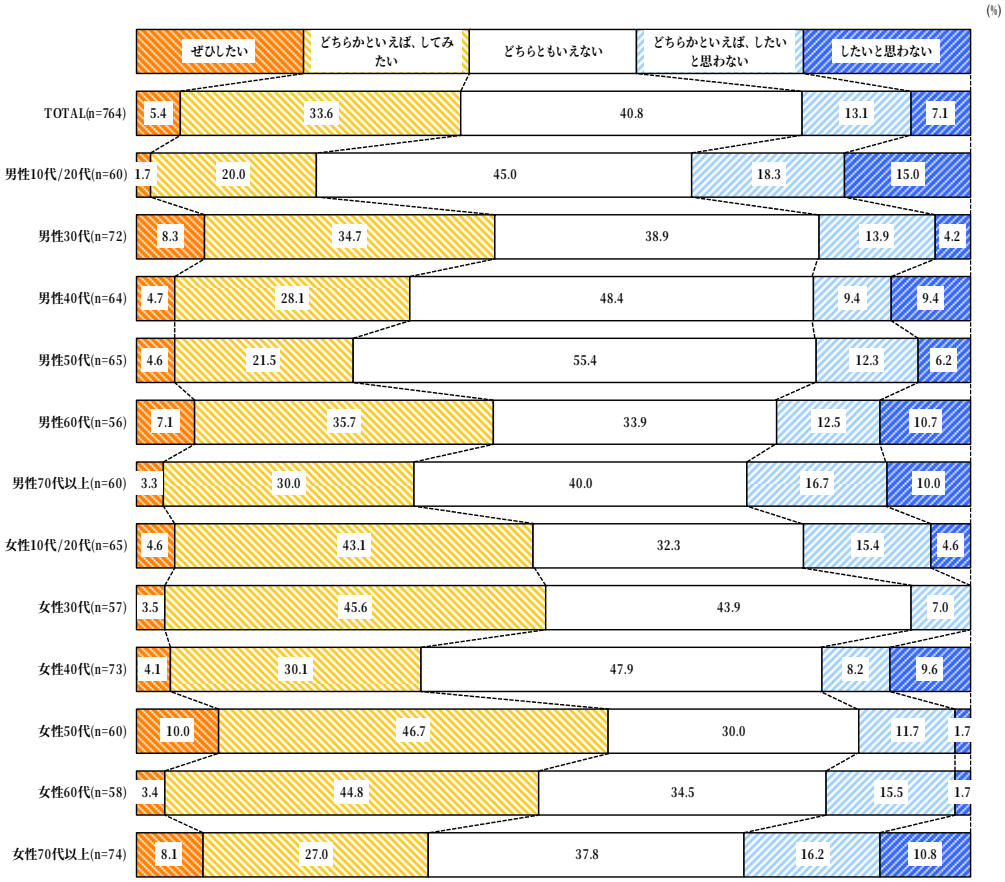


図 21　自己検査薬を使った健康管理について（n=764）

また、「ぜひしたい」、「どちらかといえば、してみたい」と回答した 298 人について、今後自分で行える検査薬が増えた場合、それらを使って自身で健康管理ができることによって、自身の意識や生活にどのような変化があると思うか問うたところ、図 21 に示すように、「病気の早期発見につながる」との回答は 228 件（76.5%）で最も多く、次いで「自分自身の健康を意識するようになる」が 198 件（66.4%）、「自分自身の健康状態がわかるので安心する」が 150 件（50.3%）、「診療所や病院に行くきっかけになる」が 128 件（43.0%）であった。

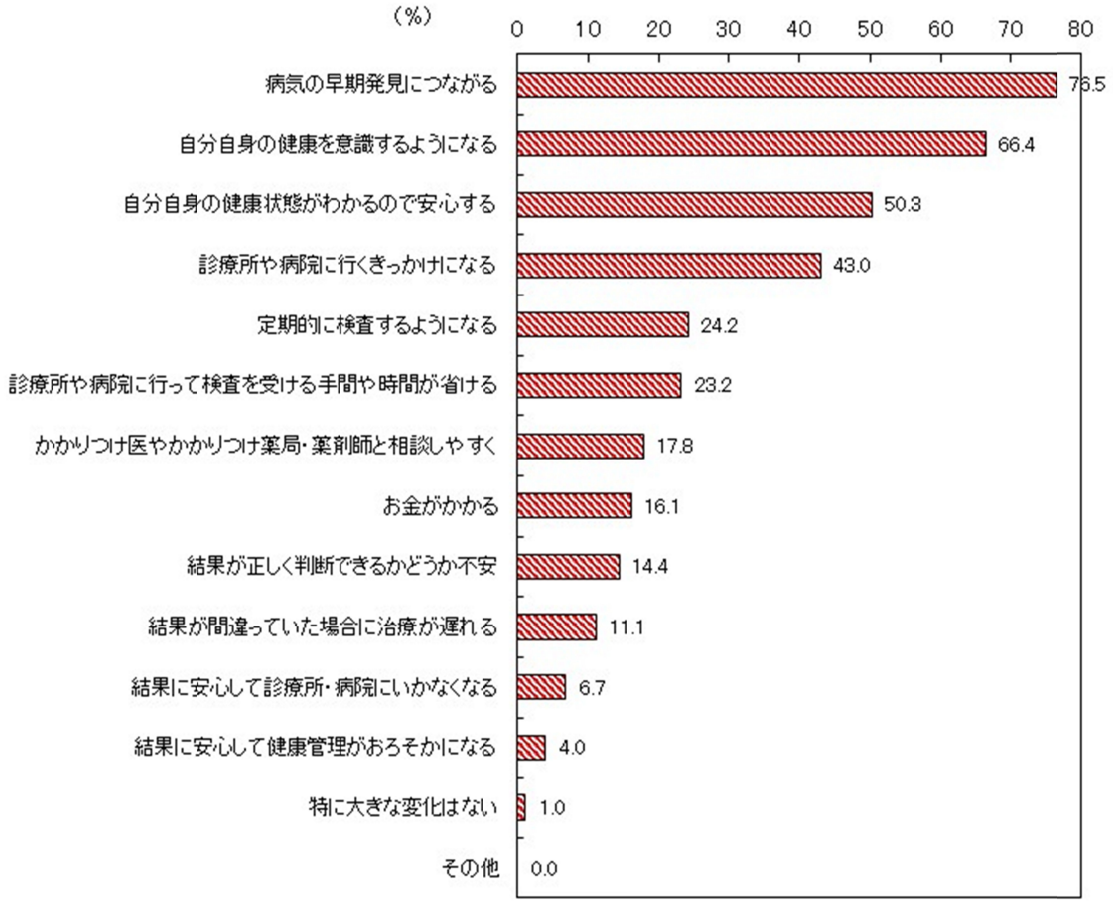
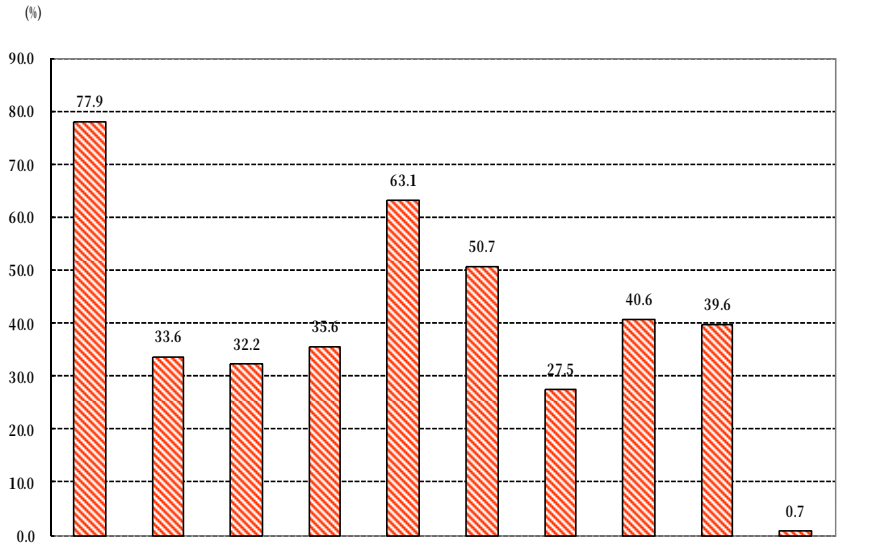


図 22　自己検査薬を使った健康管理による自分自身の意識や生活の変化について
（複数回答可）（n=298）

さらに、「ぜひしたい」、「どちらかといえば、してみたい」と回答した 298 人について、今後自分で健康状態を検査できる場合にどのような方法を利用するものであれば使用したいか問うたところ、図 23 に示すように、「尿を取り検査をする」が 77.9%と最も高く、次いで「だ液を取り検査をする」が 63.1%、「口の中の粘膜を綿棒などで取り検査をする」が 50.7%であった。「男性 30 代」では、「尿を取り検査をする」が 77.4%と最も高く、次いで「だ液を取り検査をする」が 64.5%、「呼気を取り検査をする」が 51.6%であった。「女性 10 代/20 代」では、「だ液を取り検査をする」が 64.5%と最も高く、次いで「尿を取り検査をする」が 61.3%、「口の中の粘膜を綿棒などで取り検査をする」が 51.6%であった。「女性 50 代」では、「尿を取り検査をする」が 76.5%と最も高く、次いで「だ液を取り検査をする」が 55.9%、「口の中の粘膜を綿棒などで取り検査をする」が 50.0%であった。

今後自分で行える検査薬を使って知りたいことについて問うたところ、図 24 に示すよう

に、「特になし」が 174 件（58.4%）で最も多く、次いで「健診等で指摘をうけていないが、気になる項目」が 57 件（19.1%）、「健診等で指摘をうけた項目」が 49 件（16.4%）、「かかりつけ医に受診しているが、さらに細かく自分で把握したい項目」が 41 件（13.8%）であった。



	n=	尿を取り検査をする	便を取り検査をする	鼻水を取り検査をする	鼻の中の粘膜を綿棒などで取り検査をする	だ液を取り検査をする	口の中の粘膜を綿棒などで取り検査をする	涙を取り検査をする	呼気を取り検査をする	指先などからごく微量な血液を取り検査をする	その他
TOTAL	298	77.9	33.6	32.2	35.6	63.1	50.7	27.5	40.6	39.6	0.7
男性10代/20代	13	76.9	38.5	30.8	23.1	38.5	53.8	30.8	38.5	30.8	0.0
男性30代	31	77.4	35.5	38.7	32.3	64.5	48.4	22.6	51.6	32.3	0.0
男性40代	21	71.4	38.1	33.3	23.8	71.4	47.6	19.0	42.9	38.1	0.0
男性50代	17	82.4	47.1	35.3	35.3	52.9	64.7	29.4	41.2	35.3	0.0
男性60代	24	87.5	45.8	29.2	33.3	66.7	37.5	16.7	37.5	54.2	0.0
男性70代以上	20	95.0	70.0	40.0	35.0	75.0	65.0	30.0	35.0	60.0	0.0
女性10代/20代	31	61.3	16.1	35.5	38.7	64.5	51.6	38.7	45.2	32.3	0.0
女性30代	28	82.1	28.6	39.3	42.9	85.7	67.9	42.9	53.6	32.1	3.6
女性40代	25	72.0	16.0	28.0	40.0	64.0	48.0	28.0	20.0	48.0	0.0
女性50代	34	76.5	23.5	23.5	41.2	55.9	50.0	26.5	35.3	44.1	0.0
女性60代	28	67.9	21.4	21.4	35.7	53.6	39.3	25.0	39.3	28.6	3.6
女性70代以上	26	92.3	46.2	34.6	34.6	53.8	42.3	19.2	42.3	42.3	0.0

図 23　自己検査薬の方法について（複数回答可）（n=298）

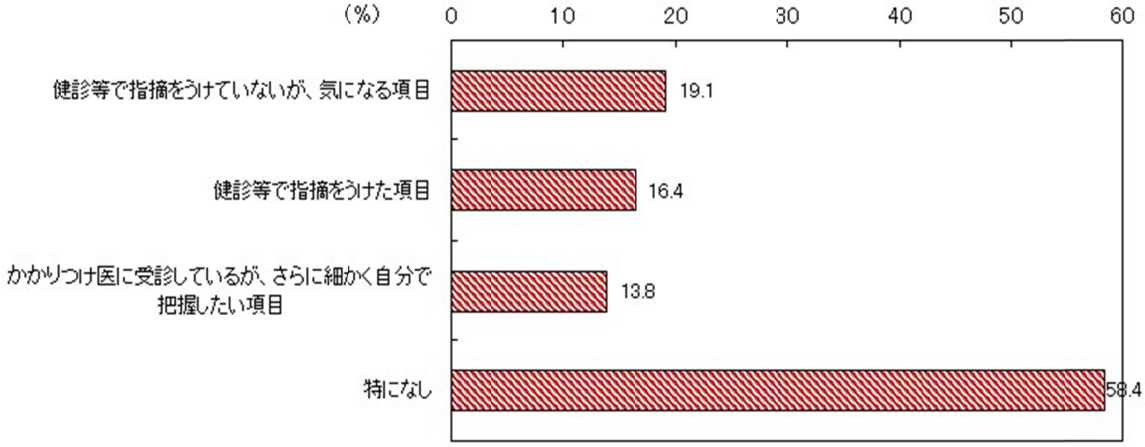


図 24　自己検査薬を使って知りたいこと（複数回答可）（n=298）

4) 検査結果で異常値が出たときの相談について

健康診断や自己検査において、検査薬の結果で異常値が出たときの相談先について問うたところ、**図 25** に示すように、「かかりつけ医に相談する」が 40.6%と最も高く、次いで「かかりつけ医はいないが、診療所や病院を受診し医師に相談する」が 38.4%、「誰にも相談しない」が 12.4%であった。「男性 30 代」では、「かかりつけ医はいないが、診療所や病院を受診し医師に相談する」が 38.9%と最も高く、次いで「誰にも相談しない」が 27.8%、「かかりつけ医に相談する」が 25.0%であった。「女性 40 代」では、「かかりつけ医はいないが、診療所や病院を受診し医師に相談する」が 53.4%と最も高く、次いで「かかりつけ医に相談する」が 20.5%、「誰にも相談しない」が 16.4%となっている。「女性 70 代以上」では、「かかりつけ医に相談する」が 77.0%と最も高く、次いで「かかりつけ医はいないが、診療所や病院を受診し医師に相談する」が 14.9%、「誰にも相談しない」が 4.1%であった。

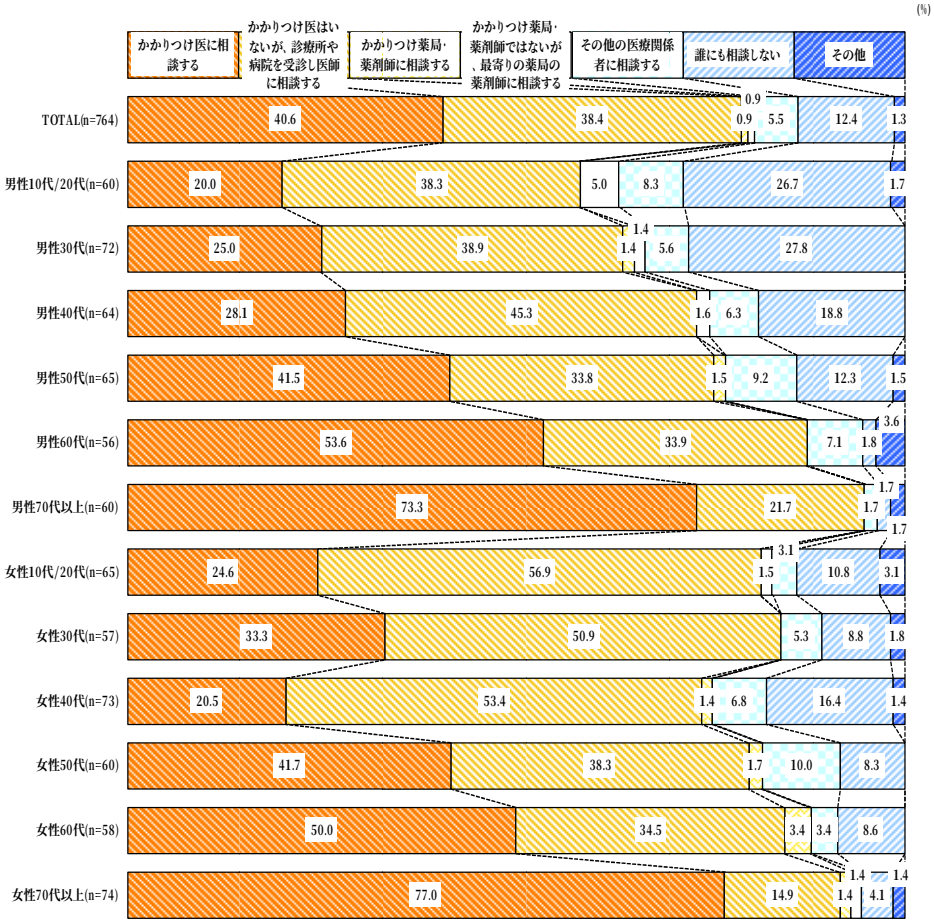


図 25　検査結果で異常値が出たときの相談先（n=764）

5) 検査結果に関する偽陰性や疑陽性について

検査結果については、偽陰性や疑陽性が存在することを知っているか問うたところ、**図 26** に示すように、「知らない」が 60.7%であった。

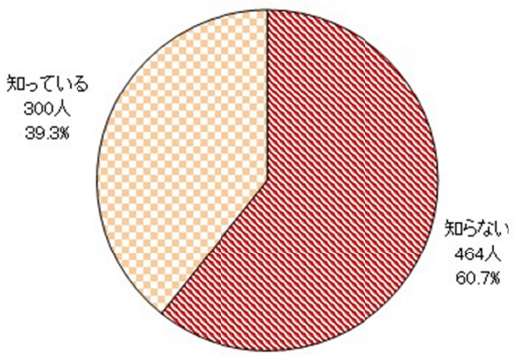


図 26　検査結果について偽陰性や疑陽性が存在すること（n=764）

4. 薬剤師に対する一般用医薬品に関する意識調査について

1) 一般用医薬品の分類についての理解

一般用医薬品がリスクに応じて第 1 類医薬品、第 2 類医薬品、第 3 類医薬品に分類されていることを「知っている」は 99.4%、「知らない」は 0.6%であった（**図 27**）。

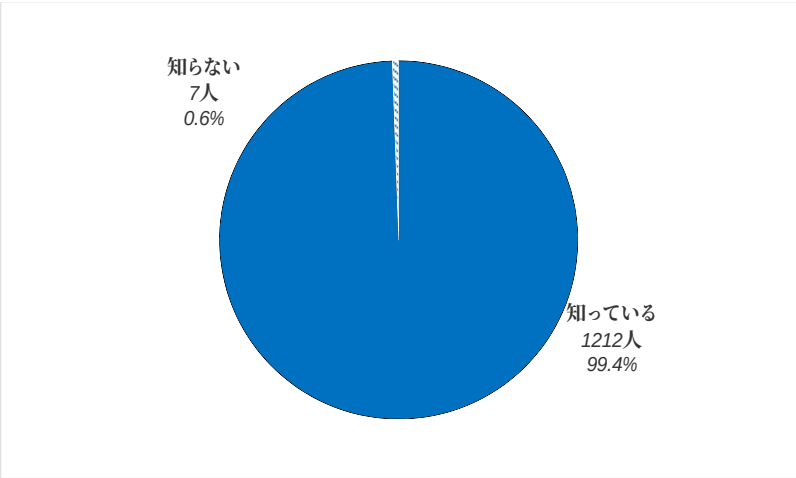


図 27　一般用医薬品が第 1 類･第 2 類･第 3 類に区分されていることについて(n=1219)

2) 一般用医薬品の副作用について

一般用医薬品の副作用の頻度については、「高い」が 1.4%、「ときどきおこる」が 36.6%、「まれにおこる」が 60.9%、「おこらない」が 0.7%であった（**図 28**）。

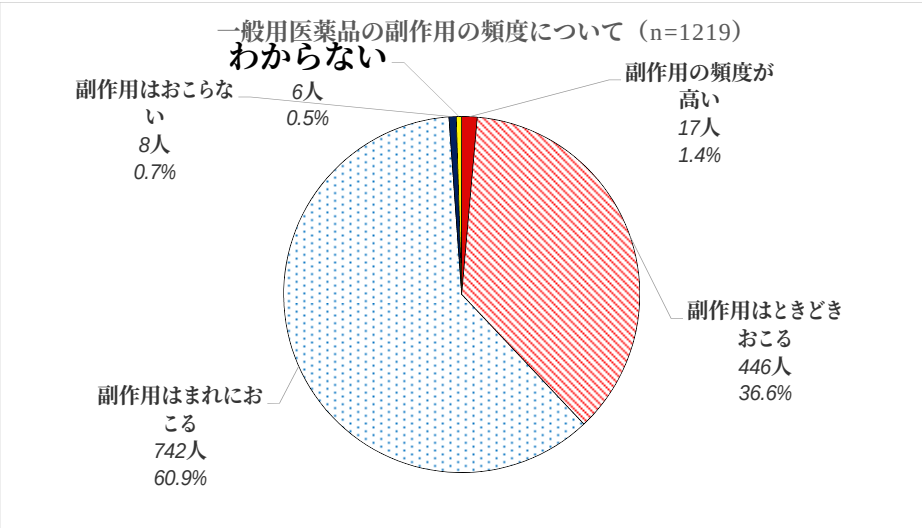


図 28 一般用医薬品の副作用の頻度について（n=1219）

また、一般用医薬品の副作用の重篤度については、薬剤師の 63.2%が「重篤な副作用がおこることがある」と認識していた（**図 29**）。

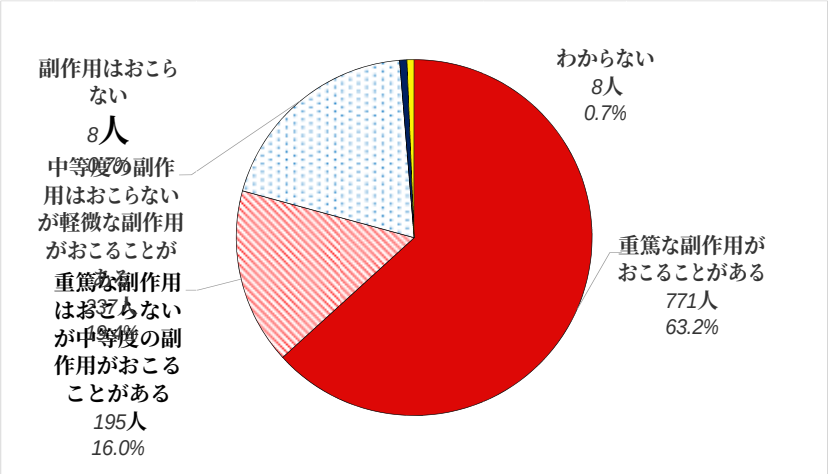


図 29　一般用医薬品の副作用の重篤度について（n=1219）

3) 一般用医薬品についてのイメージ（有効性・安全性情報）

一般用医薬品の有効性に関する情報については、「十分」「どちらかといえば十分」が合計 67.9%、安全性に関する情報については「十分」「どちらかといえば十分」の合計は 53.6%であった（**図 30**）。

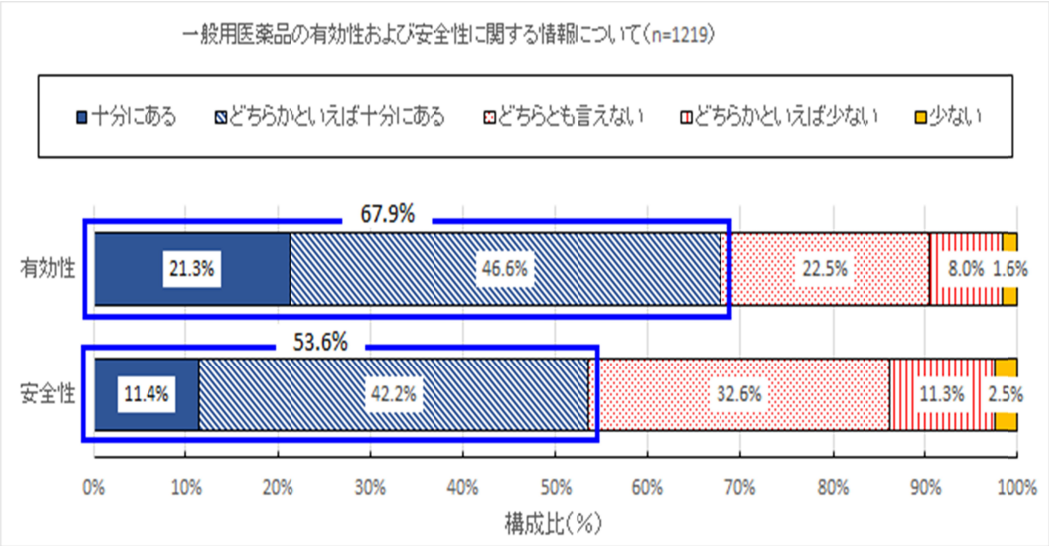


図 30　一般用医薬品の有効性および安全性に関する情報について（n=1219）

4)一般用医薬品の成分についての理解

一般用医薬品の中に依存性のある成分を含有する医薬品があることを知っているかどうかについては、「知っている」が 95.7%、「知らない」が 4.3%であった（**図 31**）。

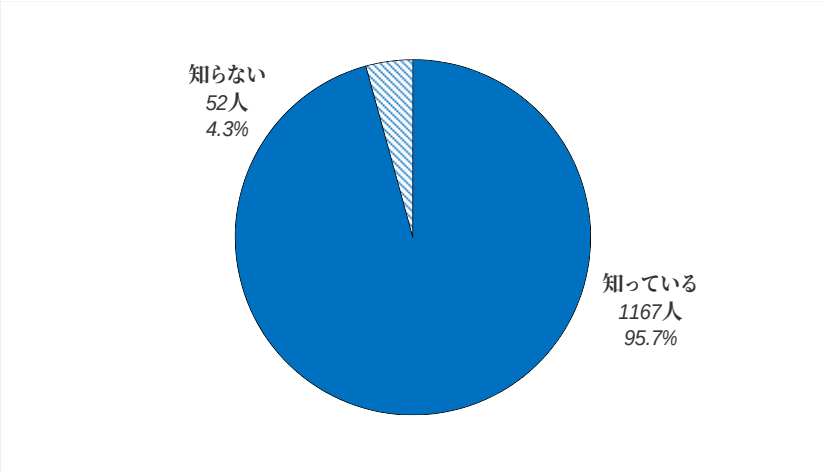


図31　一般用医薬品の中に依存性のある成分を含有する医薬品があること（n=1219）

5)一般用医薬品の副作用についての理解

一般用医薬品を原因とした重篤な副作用（死亡を含む）が起きることがあることを「知っている」薬剤師は93.9%であった（**図32**）。

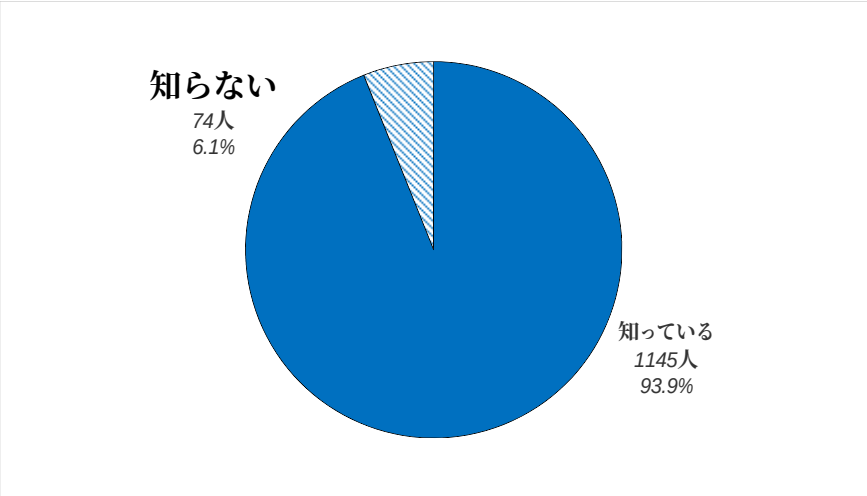


図32　一般用医薬品を原因とする重篤な副作用が起きること（n=1219）

6)来客者からの一般用医薬品についての相談の有無

過去に一般用医薬品を原因とした副作用を経験した来客者の相談を受けたことのある薬剤師は71.0%であった（**図33**）。

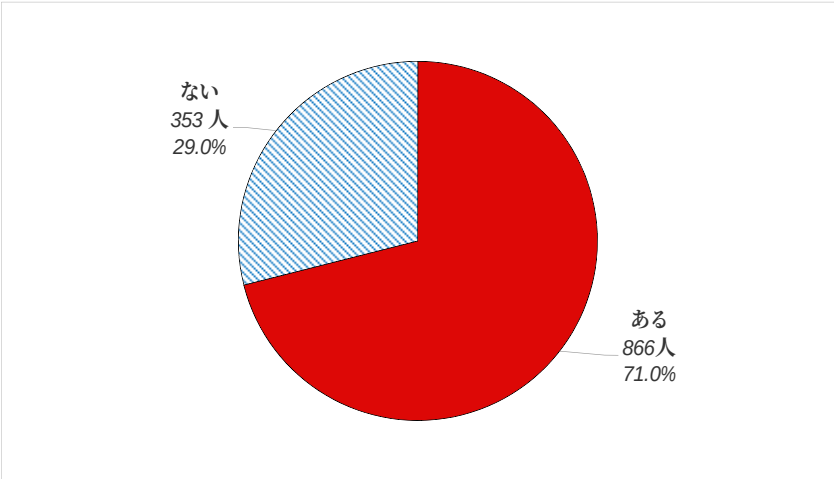


図 33　一般用医薬品を原因とした副作用を経験した来客者の相談を受けたことについて（n=1219）

6)来客者への受診勧奨

過去に来客者に対して受診勧奨をしたことのある薬剤師は 99.0%であった（**図 34**）。

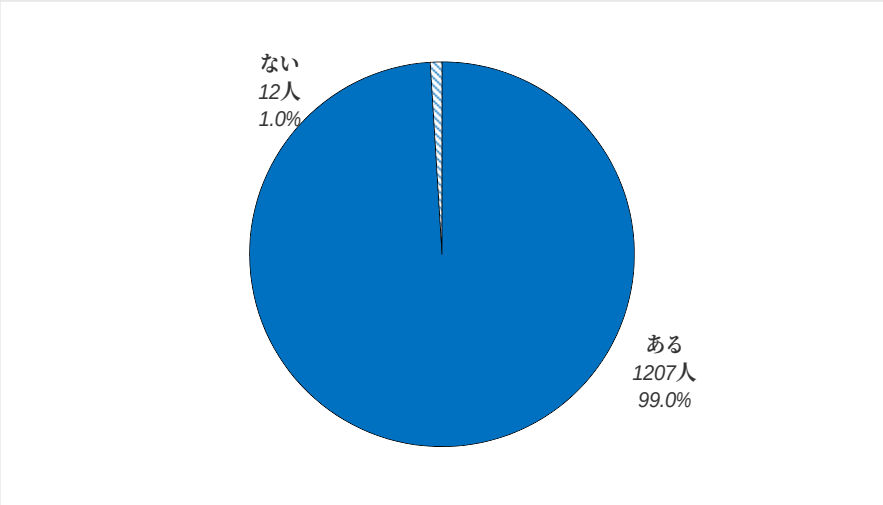


図 34　来客者に受診を勧めたことについて（n=1219）

7)医薬品副作用被害救済制度についての理解

一般用医薬品も対象となる医薬品副作用被害救済制度があることを「知っている」は 98.7%、「知らない」は 1.3%であった（**図 35**）。

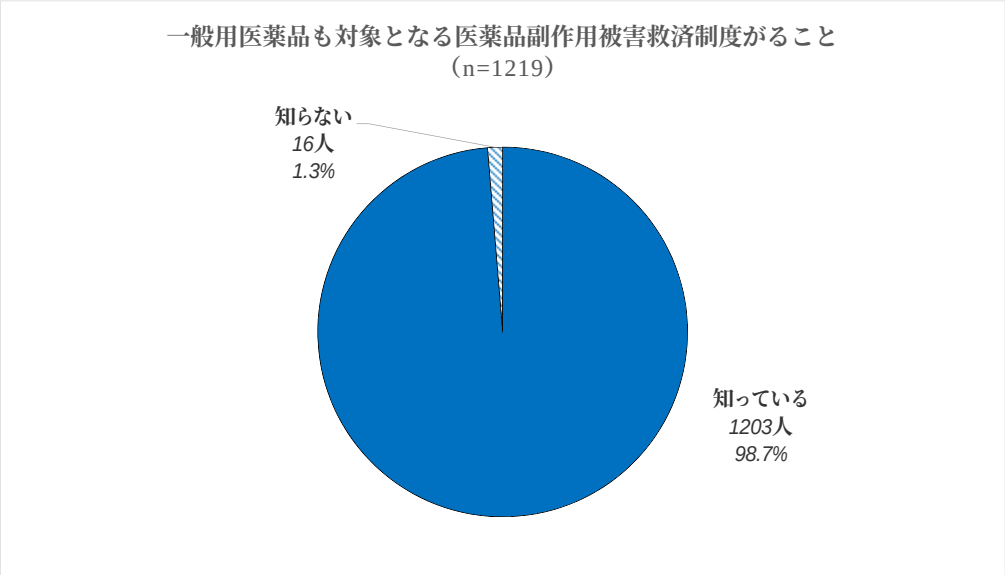


図 35　一般用医薬品も対象となる医薬品副作用被害救済制度があること（n=1219）

7)要指導医薬品について

要指導医薬品という言葉を聞いたことがある薬剤師は 74.2%であった（**図 36**）。

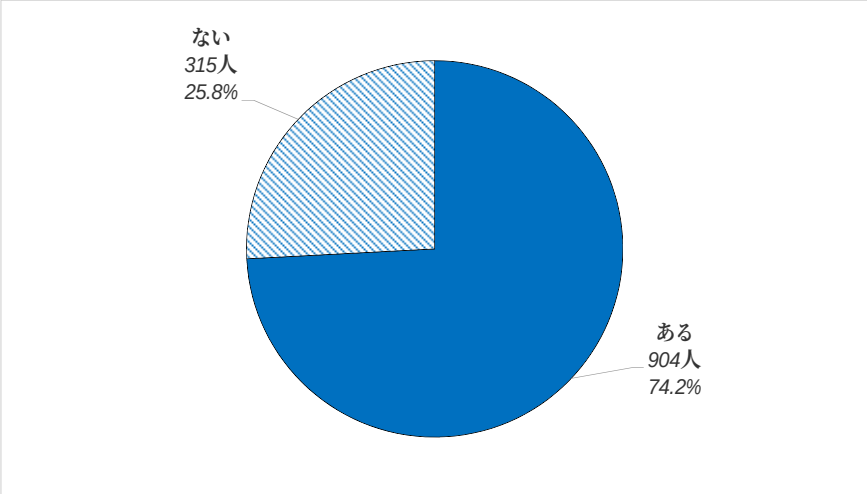


図 36　要指導医薬品という言葉を聞いたことがある（n=1219）

8)スイッチ OTC 化の今後について

スイッチ OTC 医薬品として検討可能と思われる医薬品（薬効群ごと）について、「あり」と回答した割合は消化器官用薬 49.6%、眼科用薬 40.4%、アレルギー用薬 32.6%、外皮用薬 29.6%の順であった（**図 37**）。

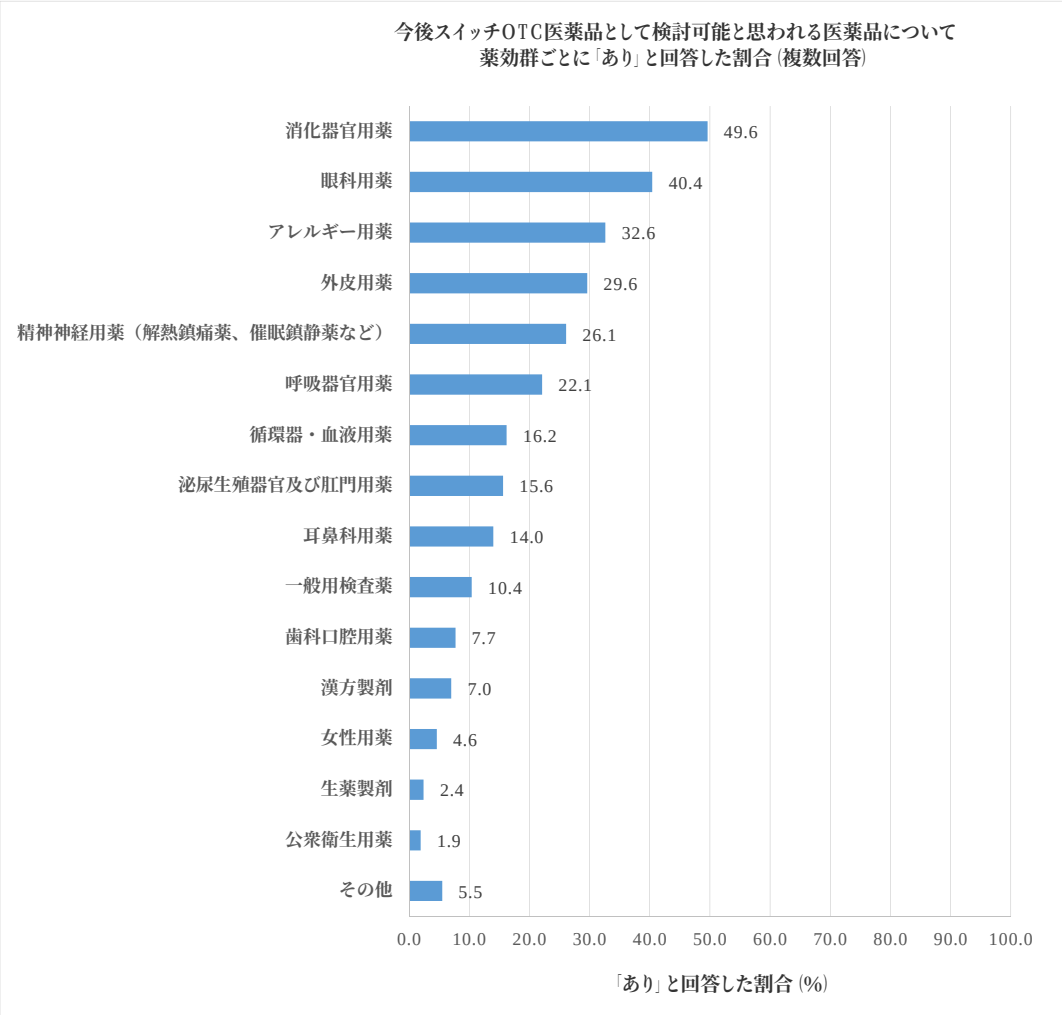


図 37　薬効群ごとの今後スイッチ OTC 医薬品として検討可能と思われる医薬品について（複数回答可）（n=1219）

スイッチ OTC 医薬品として検討可能と思われる医薬品について、「あり」と回答した薬剤師には、具体的な医薬品名を記載してもらった。一定数以上挙げられたものは、第 2 世代抗ヒスタミン薬（243 件）（アレロック、クラリチン、ザイザル、タリオンなど）、プロトンポンプ阻害薬（235 件）（タケプロン、パリエット、オメプラゾールなど）、防御因子増強薬（215 件）（ムコスタなど）、非ステロイド性抗炎症薬（192 件）（ボルタレンなど）、気管支拡張薬（163 件）（ホクナリンテープ、メプチンなど）、ドパミン受容体拮抗薬（胃腸機能調

整薬）（147 件）（ナウゼリン、プリンペランなど）、角膜治療薬（145 件）（ヒアレインなど）、外皮用ステロイド薬（142 件）（リンデロンなど）、眼科用抗菌薬（127 件）（レボフロキサシンなど）、外皮用抗菌薬（124 件）（ゲンタシンなど）、降圧薬（100 件）（アムロジピンなど）、高脂血症治療薬（77 件）（メバロチンなど）であった。

また、「アレグラ」、「アレジオン 10」、「セルベックス」、「ロキソニン」、「ガスター10」など、すでに一般用医薬品として販売済みのものも挙げられていた。

5. 薬剤師に対する一般用検査薬に関する意識調査について

1) 一般用検査薬を使用する場合に差支えのないと思われる検体採取方法

一般の生活者または患者が自分で一般用検査薬を使用する場合、どのような検体採取方法であれば差し支えないと考えるか問うたところ、**図 38** に示すように、「尿を採取」が 90.2%、「だ液を採取」が 75.4%であった。

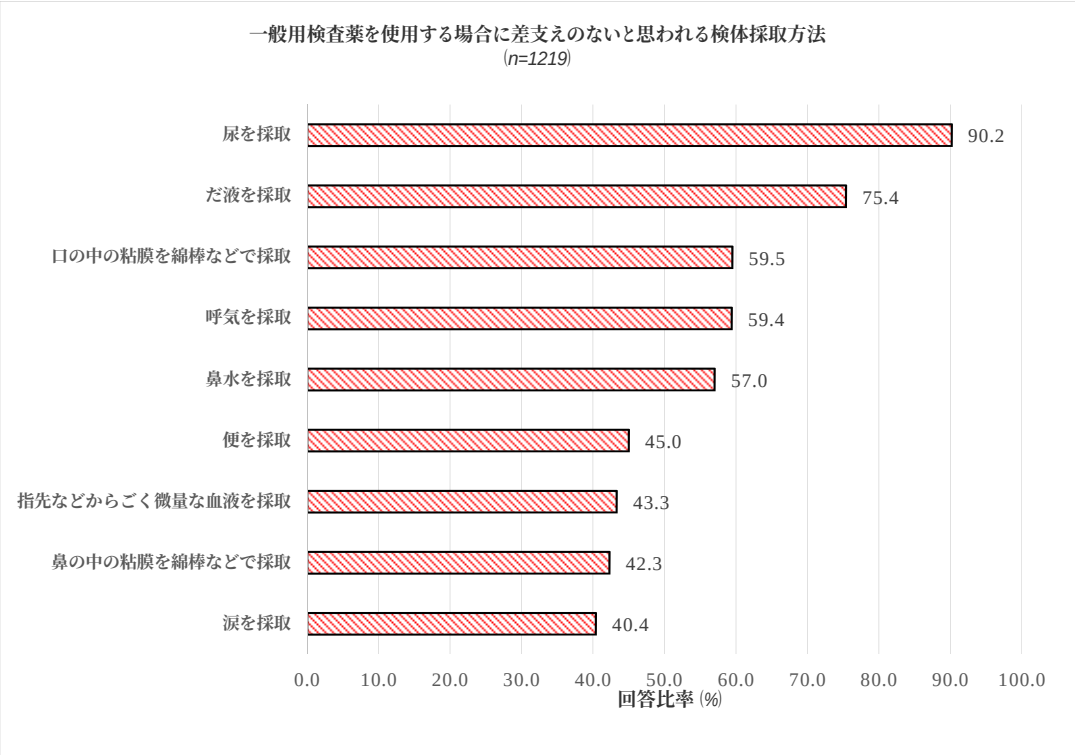


図 38　一般用検査薬を使用する場合に差支えのないと思われる検体採取方法（n=1219）

2) 一般用検査薬に求められる要件やその結果の利用方法について

生活者または患者が自分で使用できる一般用検査薬には要件が必要かどうかを問うたところ、**図 39** に示すように、73.3%が「要件が必要」と回答した。次いで、「要件が必要」と回答した 894 人に対して、一般用検査薬に求められる要件やその結果の利用方法について問うたところ、**図 40** に示すように、「検体採取が簡便である」が 83.4%で最も割合が高く、

次いで「結果によって生活者がどこに相談すべきかが明確である」が 73.9%、「結果の評価が容易である」が 73.8%であった。「かかりつけ薬局・薬剤師が結果を共有できる」や「かかりつけ医が結果を共有できる」もそれぞれ 73.0%と 69.0%であった。

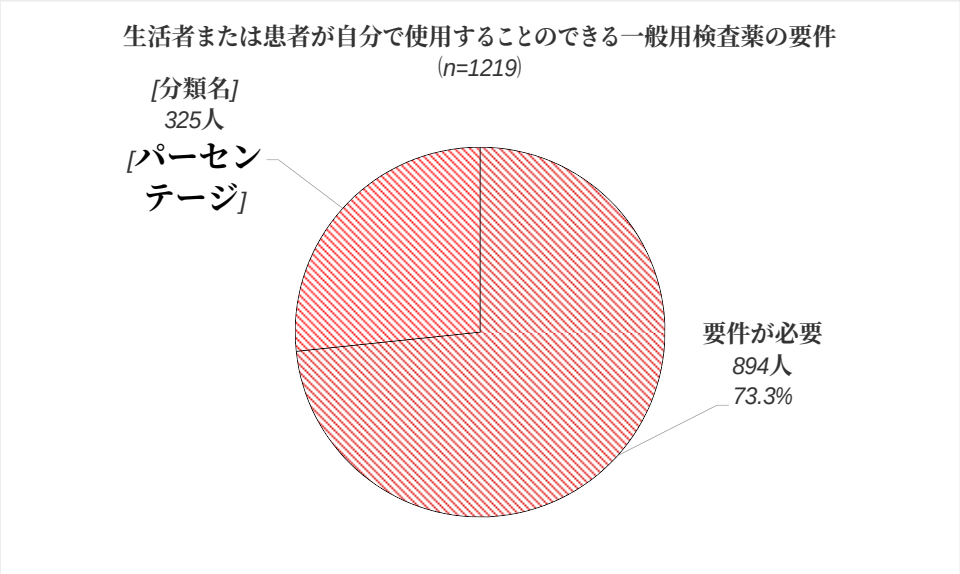


図 39　生活者または患者が自分で使用することのできる一般用検査薬に対する要件の必要性（n=1219）

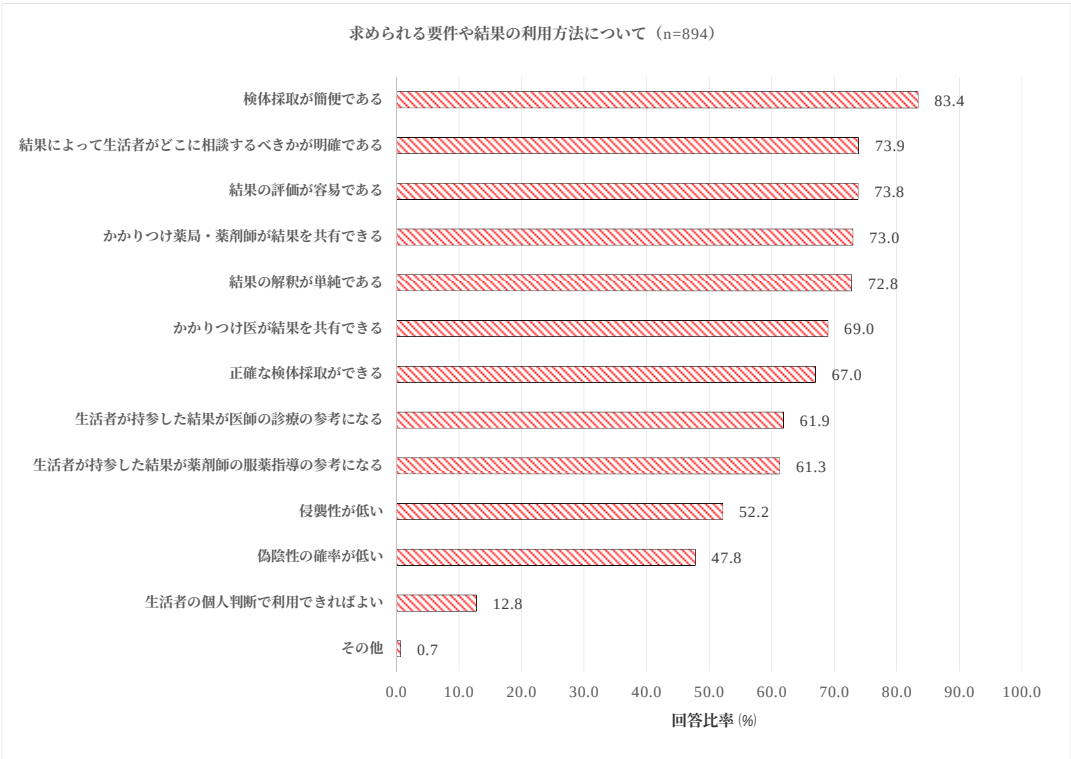


図 40　求められる要件や結果の利用方法について（n=894）

3) 生活者または患者が自分で使用することができる一般用検査薬としての項目について

地域包括ケアや健康情報拠点として地域の診療所や病院とともに生活者または患者への服薬指導等の参考になると思われる検査項目について問うたところ、**図 41** に示すように、「血糖値」が 82.4%、「HbA1c」、「コレステロール、中性脂肪」がそれぞれ 68.6%、68.3%であった。

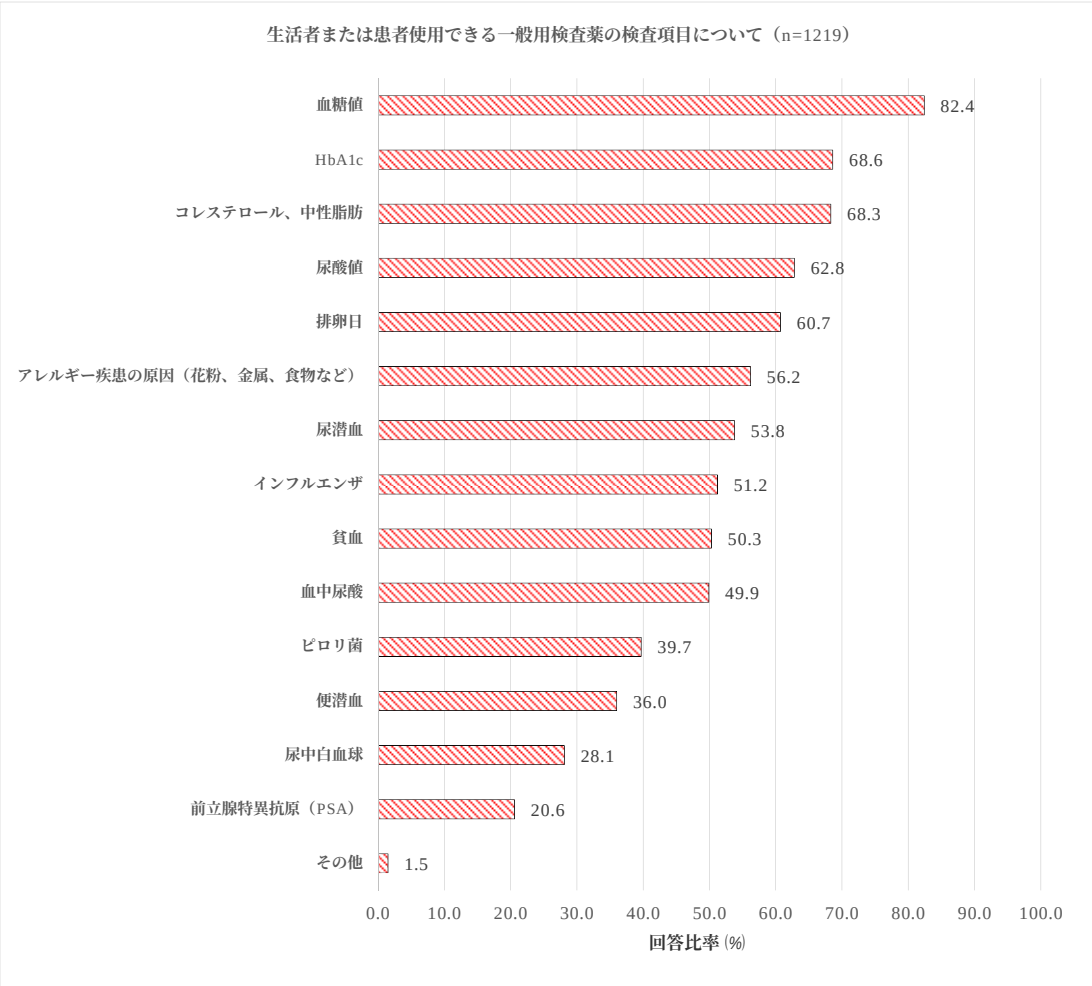


図 41　生活者または患者が自分で使用することができる一般用検査薬としての項目について(複数回答可)（n=1219）

4) 一般用検査薬の利用による生活者または患者の意識や生活への変化について

一般用検査薬を利用することで、生活者または患者の意識や生活にどのような変化があると考えるかを問うたところ、**図 42** に示すように、「自分自身の健康を意識するようになる」が 89.8%、「病気の早期発見につながる」が 85.7%、「診療所や病院に行くきっかけになる」が 76.5%であった。

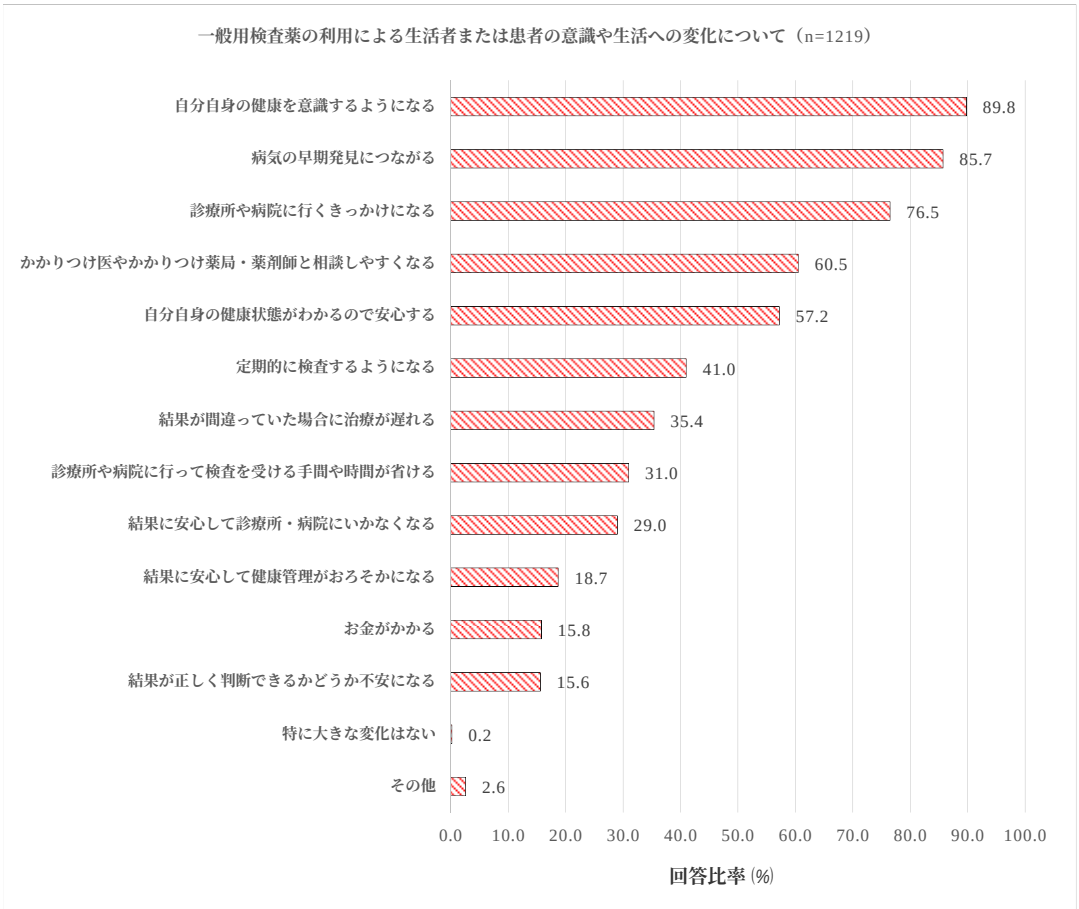


図 42　一般用検査薬の利用による生活者や患者の意識や生活への変化について（複数回答可）（n=1219）

5. 医師に対する一般用医薬品および一般用検査薬に関する意識調査について

医師を対象とした一般用医薬品および一般用検査薬に関する意識調査については、日本医師会に協力を仰ぐこととし、生活者及び薬剤師用とともに調査項目を検討した。

D. 考察

本研究では、スイッチ OTC 薬のあり方等について検討するにあたり、一般用医薬品および一般用検査薬に対する生活者および薬剤師の意識調査を行った。

今回、生活者に対する一般用医薬品および一般用検査薬の意識調査については、生活者の調査項目に対する負担を軽減するために、一般用医薬品に関する調査群と一般用検査薬に関する調査群の 2 群に分け実施した。両群ともに、株式会社インテージが保有するインテージ・ネットモニターを利用しインターネット調査を行った。なお、調査対象者の年齢については年代ごとに数を揃えた。回答者の性別、年齢構成、職業については両群ほぼ同

様であった。各調査群の回収率は、一般用医薬品に関する調査群が 24.1%、一般用検査薬に関する調査群は 21.4%であった。

また、薬剤師の調査については、日本薬剤師会会員および日本チェーンドラッグストア協会会員向けに調査画面の URL を公開し、WEB 上でのインターネット調査を実施したが、各会各々の回答数および回収率を把握することは出来ず、全体の回答数としては 1,219 人であった。薬剤師の回答者属性としては、年齢階級別では、30 代が多く、また全国平均[1)]と比べて年齢層が高かった。

生活者における一般用医薬品に対する意識調査については、一般用医薬品の分類において、第一類医薬品、第二類医薬品、第三類医薬品の区分が医薬品のリスクの程度により分類されていることを知っている生活者は 7 割近くに及んでおり、多くの生活者が一般用医薬品に関するリスク分類について知っていることが明らかとなった。

過去の一般用医薬品の使用状況については、年齢、性別問わず、かぜ薬、胃腸薬の使用頻度が高い傾向にあることがわかった。また、一般用医薬品の使用（購入）理由については、「普段から一般用医薬品を使用している」からという回答が半数あり、比較的多くの生活者が一般用医薬品を普段から使用していることが推測された。また、「病院や診療所に行く時間がとれない」からという回答も 27.8%であり、生活者にとって一般用医薬品は手軽に使用、購入できるものと考えられた。

一般用医薬品に対するイメージとして多くの生活者は利便性が高いと感じているが、安全性について高いと感じている生活者は 4 割程度であり、情報の量については、多いまたはどちらかといえば多いと感じている生活者は 25.7%であり、少ないまたはどちらといえば少ないと感じている生活者は 13.5%であり、一般用医薬品について、安全性の面や情報量について十分とは言えない現状が示された。

生活者における一般用検査薬に対する意識調査について、健康診断や人間ドックも受診状況は 10～20 代では男女問わず、受診の割合が低く、年齢が高くなるにつれ、受診する割合が高くなる傾向は示された。ただし、30 代については、男性の受診の割合は半数以上に上る一方、女性は 4 割程度であった。主婦層の健康診断や人間ドックの受診の割合が低いことが明らかとなった。

健康状態の把握については、性別を問わず若年者では、専門家に相談する前にまず自分で出来る範囲のことをすると回答しており、年齢が上がるにつれ、かかりつけ医や診療所、病院を受診し相談する傾向が示された。

自己検査薬を使った健康管理については、「どちらともいえない」が 40.8%と最も高かった。「ぜひしたい」または「どちらかといえば、してみたい」を合わせると 39.0%であり、自己検査薬を使った健康管理について、今後生活者に広く説明や教育を行うことで、してみたいという意向を示す生活者が増える可能性が示唆された。

さらに、自己検査薬の方法については、「尿を取り検査をする」が最も高く、次いで「だ液を取り検査をする」、「口の中の粘膜を綿棒などで取り検査をする」の順であった。やは

り、侵襲性の低い方法を求める傾向にあり、今後一般用検査薬の検査方法について考える上で、重要視しなければならない点であると考えられた。

健康診断や自己検査において、検査薬の結果で異常値が出たときの相談先については、かかりつけ医または診療所や病院を受診し医師に相談するが 8 割程度を占めており、検査結果で異常値が出た場合には医療機関に受診するという対応について、生活者は十分理解していると考えられた。

薬剤師における一般用医薬品および一般用検査薬に対する意識調査について、一般用医薬品の副作用の頻度については、「副作用はまれにおこる」と「副作用はときどきおこる」がそれぞれ 60.9%、36.6%であり、また、一般用医薬品の副作用の重篤度についても、「重篤な副作用がおこることがある」63.2%と最も高く、「中等度の副作用はおこらないが軽微な副作用がおこることがある」と「重篤な副作用はおこらないが中等度の副作用がおこることがある」がそれぞれ 19.4%、16.0%であった。このように、薬剤師は一般用医薬品に対して、副作用の発現頻度や重篤な副作用の発現の可能性について十分理解していることがわかった。

一般用検査薬に求められる要件やその結果の利用方法については、「検体採取が簡便である」、「結果によって生活者がどこに相談すべきかが明確である」、「結果の評価が容易である」であり、薬剤師は一般用検査薬について簡便性や評価の判断のし易さ等が要件として重要視していることが明らかとなった。また、「かかりつけ薬局・薬剤師が結果を共有できる」や「かかりつけ医が結果を共有できる」もそれぞれ 73.8%と 69.5%であり、検査結果を医療者側と共有できることも必要な要件と捉えている。

地域包括ケアや健康情報拠点として地域の診療所や病院とともに生活者または患者への服薬指導等の参考になると思われる検査項目については、「血糖値」、「HbA1c」、「コレステロール、中性脂肪」といった生活習慣病に関する検査項目が挙げられた。

一般用検査薬を利用することで、生活者または患者の意識や生活にどのような変化があると考えるについては、「自分自身の健康を意識するようになる」、「病気の早期発見につながる」、「診療所や病院に行くきっかけになる」、「かかりつけ医やかかりつけ薬局・薬剤師と相談しやすくなる」といった点を挙げており、生活者が一般用医薬品を利用することによるメリットが大きいと考えていることが示された。

なお、医師を対象とした一般用医薬品および一般用検査薬に関する意識調査については、日本医師会に協力を仰ぐこととし、生活者及び薬剤師用とともに調査項目を検討した。

E. 結論

本調査によって、生活者および薬剤師における一般用医薬品や一般用検査薬に対する意識やニーズが明らかとなった。生活者にとって、一般用医薬品は利便性が高いと考えてられているが、一方で安全性や情報量については不十分と考えており、一般用医薬品へのスイッチ化において、今後検討しなければならない事項と考えられた。一般用検査薬については、侵襲性の低い検査方

法が求められる。薬剤師は、一般用医薬品に対して、副作用の発現頻度や重篤な副作用の発現の可能性について十分理解されている。一般用検査薬については、簡便性や評価の判断のし易さが要件と考えており、また、地域包括ケアや健康情報拠点として地域の診療所や病院とともに生活者または患者への服薬指導等の参考になると思われる検査項目として、「血糖値」、「HbA1c」、「コレステロール、中性脂肪」といった生活習慣病に関する検査項目が挙げられた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

I. 参考文献

1）厚生労働省：平成 24 年（2012 年）医師・歯科医師・薬剤師調査の概況〈http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/12/index.html〉(2014/5/31 アクセス)

別表１　生活者（一般用医薬品に関する調査群）回答者属性

Q あなたの性別をお答えください。(回答は1つ)あなたご自身についてお答えください。

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	781	100.0
男性	382	48.9
女性	399	51.1

Q あなたの年齢をお答えください。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	781	100.0
男性10代/20代	70	9.0
男性30代	64	8.2
男性40代	66	8.5
男性50代	63	8.1
男性60代	62	7.9
男性70代以上	57	7.3
女性10代/20代	68	8.7
女性30代	69	8.8
女性40代	62	7.9
女性50代	63	8.1
女性60代	61	7.8
女性70代以上	76	9.7

Q あなたのご職業をお答えください。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	781	100.0
会社員	223	28.6
公務員	29	3.7
自営業	58	7.4
主婦／主夫	198	25.4
学生	57	7.3
無職	132	16.9
その他	84	10.8

Q あなたにはかかりつけの医師がいますか。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	781	100.0
いる	429	54.9
いない	352	45.1

Q あなたにはかかりつけの薬局・薬剤師がありますか(いますか)。(回答は1つ)
※薬局・薬剤師のどちらか一方がある(いる)場合は、「ある(いる)」にチェックを、どちらもない(いない)場合は、「ない(いない)」にチェックをつけてください。

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	781	100.0
ある（いる）	263	33.7
ない（いない）	518	66.3

Q あなたが住んでいるところもしくは通勤・通学先で最も近い医療機関(病院や診療所)はどこにありますか。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	781	100.0
徒歩圏内にある	484	62.0
交通機関を使って1時間以内にある	271	34.7
交通機関を使って1～2時間以内にある	6	0.8
上記の範囲にはない	20	2.6

Q あなたの病院や診療所への通院状況をお答えください。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	781	100.0
現在病院や診療所にかかっている	366	46.9
以前病院や診療所にかかっていた（今はかかっ	328	42.0
これまで病院や診療所にかかったことがない	87	11.1

Q あなたの現在の薬局・薬店の利用頻度をお答えください。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	781	100.0
週に1回以上	25	3.2
月に3～4回	21	2.7
月に1～2回	241	30.9
2～3カ月に1回以下	386	49.4
利用しない	108	13.8

別表 2　生活者（一般用検査薬に関する調査群）回答者属性

Q あなたの性別をお答えください。(回答は1つ)あなたご自身についてお答えください。

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	764	100.0
男性	377	49.3
女性	387	50.7

Q あなたの年齢をお答えください。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	764	100.0
男性10代/20代	60	7.9
男性30代	72	9.4
男性40代	64	8.4
男性50代	65	8.5
男性60代	56	7.3
男性70代以上	60	7.9
女性10代/20代	65	8.5
女性30代	57	7.5
女性40代	73	9.6
女性50代	60	7.9
女性60代	58	7.6
女性70代以上	74	9.7

Q あなたのご職業をお答えください。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	764	100.0
会社員	244	31.9
公務員	23	3.0
自営業	57	7.5
主婦／主夫	185	24.2
学生	45	5.9
無職	140	18.3
その他	70	9.2

Q あなたにはかかりつけの医師がいますか。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	764	100.0
いる	361	47.3
いない	403	52.7

Q あなたにはかかりつけの薬局・薬剤師がありますか(いますか)。(回答は1つ)
※薬局・薬剤師のどちらか一方がある(いる)場合は、「ある(いる)」にチェックを、どちらもない(いない)場合は、「ない(いない)」にチェックをつけてください。

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	764	100.0
ある（いる）	223	29.2
ない（いない）	541	70.8

Q あなたが住んでいるところもしくは通勤・通学先で最も近い医療機関(病院や診療所)はどこにありますか。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	764	100.0
徒歩圏内にある	483	63.2
交通機関を使って1時間以内にある	248	32.5
交通機関を使って1～2時間以内にある	10	1.3
上記の範囲にはない	23	3.0

Q あなたの病院や診療所への通院状況をお答えください。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	764	100.0
現在病院や診療所にかかっている	338	44.2
以前病院や診療所にかかっていた（今はかかっ	307	40.2
これまで病院や診療所にかかったことがない	119	15.6

Q あなたの現在の薬局・薬店の利用頻度をお答えください。(回答は1つ)

(度数+横%)

	度数	%
TOTAL	764	100.0
週に1回以上	13	1.7
月に3～4回	30	3.9
月に1～2回	215	28.1
2～3カ月に1回以下	343	44.9
利用しない	163	21.3